

---

# 光と闇

緋翠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

光と闇

### 【Nコード】

N5799U

### 【作者名】

緋翠

### 【あらすじ】

頭脳明晰、運動神経抜群で顔も性格も良いと言われる幼馴染が異世界で勇者に。

ごり押しして船に乗ったら嵐に巻き込まれ、何故か聖女様に海へ突き落されました。

以後異世界観光しつつ、のんびりと元の世界へ帰る方法を探す勇者の幼馴染の話。

段々主人公が最強ちっくになっていきます。

勝手ながら、以前まで連載していた「光と影」「光と闇」を削除

し、新たに投稿させて頂きました。

諦めだけは特技に近い所為で彼女は今この状況にももう慣れていた。しかし幼馴染と一緒に居ても飽きないと思ってしまうた自分を無償に殴りたくなつた。

普段幼馴染と帰る事はない。

こちらが徒歩で学校に行くのに対し、向こうは自転車で通学、という理由もある。

幼馴染と言つても、お互いの両親が仲が良いだとか、そういうので小学生の時まで家族ぐるみでよく遊んでいただけだ。

中学生になってからはお互い喋る回数も減つていった。

幼馴染とはいえ所詮は思春期盛りの子どもだ。

高校三年生ともなればめつきり話す機会はなくなった。

だがそれは学校での話で、意外にも学校から帰れば普通に話し出す。そしてたまには共に帰る仲だった。

段々自分が幼馴染のトラブルに巻き込まれてきたと実感してきたのは小学校高学年辺りだった。

そしてそれが嫌がらせ、その他諸々よくありそうな感じのトラブルだと知るのは中学に上がってからだ。

ネット環境が揃う事になつた自分は嬉しくて仕方なくて日々ネットサーフィン。

そこで知つたのは、どこか親近感が沸くもので。

しばらく経つた後に「あれ、これ私とアレ（幼馴染）じゃ…？」と気付き出す。

幼馴染がイケメンで頭やら運動神経も良いと来れば、後は王道的展開である。

小学校高学年辺りからモテ始めた彼は誰とも付き合うでもなく、だ

が女の子達との親密な交流も忘れない。

こいつはガキの頃からハーレムを作るような人物であった。

ミーハーかなんかだろうと思われる人物もいたが、それ以上に幼馴染自身が一人一人と向き合っていたのが原因だと思われる。

しかし一見では優男のような、いつでも柔らかな笑みを浮かべているが、性格はなんともいい難い。

時にはこちらが火の粉が降りかかるうが、ヤツは高みの見物と言わんばかりに裏で愉しんでいる人間なのだ。

反対に、怪我を負わんばかりの被害が私に降りかかりそうになればヤツは止めに入ってくる。

随分と長い幼馴染の紹介ではあったが、平穩な私の学生生活を脅かしてくれたのはこいつが原因だ。

今回は随分とまたでかい面倒事をぶら下げて、いらんテンプレも付けてくれるとか、異世界に強制連行されるとかそういう特典は迷惑なんで、本当にいらぬです。

「待て玲、お前だけ逃れるつもりか！裏切り者め！」

「何が裏切り者よ。その、変な幾何学模様に大人しく吸い込まれて野垂れ死になさいっ！」

教室の扉を必死になって掴む玲は今、幾何学模様に吸い込まれかけている幼馴染に捕まっていた。

男女の差ではあるが人間危機が迫ればそれなりに力も出る。所謂火事場の馬鹿力。

しかし同じく危機に瀕する幼馴染もまた、馬鹿力を発揮していた。およそ玲の倍の馬鹿力ではあったが、徐々に自分の足半分が沈んだ時、遂に玲の手が扉から離れた。

「こうなったら道連れにしてやるぞ、我が幼馴染よ……！！！」

「ここで厨二発言する君はどつやら余裕らしいわね。私の事は気にしないで、一人旅でも楽しんでらっしゃい」

とは言うが、実際扉から手が離れた時点で玲は諦めていた。

そしてこの台詞がこの世で最後の台詞となり、彼ら2人の声を聞いた者はいなかった。

私達はどうかやら異世界に迷い込んだらしい。

らしいというのも、もしかしたらこれは何処かの宗教団体がこいつを崇めたてようとして誘拐したのかもしれないからだ。

そして私は口封じの為に殺されそうだ。

ほんつと面倒だわ、この幼馴染。

目の前には濃紺の裾が足首まであるマント、というよりローブを着た人達が五人いた。

その中で一際目立つ服を着た人が指輪を一哉君（幼馴染の名前）の指に付けると、一歩下がって何かを言った。

指輪の効果なのだろうか、一哉君が何を言われたのか分からなかったが（英語じゃなかった）彼は二つ返事で何かを引き受けたみたいだ。

きっとようこそいらっしやいました勇者様、だったら引き受けた一哉君アホなんじゃないの。

その部屋は広く内装が凝られていた。

調度品といった物は無かったが、足元に目を見遣ると床にあの幾何学模様がかすかに残っていた。興味本位ですつとなぞってみると、触れた箇所だけが光を帯びる。

慌てて手を引っ込めればすぐに元に戻ったけど……あーびっくりした。

タイミング良く立ち上がると幼馴染が通訳してくれた。

「部屋に案内してくれるみたいだぜ」

「……急な出来事ね」

「大丈夫、害は無いよ。俺と玲が勇者な限り」  
「は？」

勇者？え、何これ……やっぱリテンプレ的展開なの？

しかし何よりの通訳（という名の幼馴染）がいないと困る私は、さつさと例の代表者と共に先を行く幼馴染の後ろを付いていく事にした。

幼馴染と仲が良さそうに話すのは、先程の代表者だ。

テンプレだと巫女、かなあ。

その女性はたまに頬を赤く染めながら幼馴染と会話していく。

無論、何を喋っているのなんて私には聞こえない。

だけど分かる、私には分かるわ…… あ的女性は幼馴染に落とされた。

とりあえず自分の目的は異世界の言語と文字の習得になりそうだと思うながら、目の前で幼馴染にやられたこの女性が、私に被害をもたらすことがないよう祈るだけだ。

恭しくお辞儀をして出て行った侍女のような綺麗な人たちが何かを言っ出て行くと、しんと静かになる。

はあ、という溜め息を吐いた彼女は倒れ込むように豪華なベッドに寝転がる。

ふかふかのベッドに優しく包まれると、すぐに寝てしまいそうだ。

しかし、元の世界に戻るのか？と思考を巡らせ始めれば、意識がはつきりとしてくる。

ああ本当にファンタジーなんだなーとか、此処何処だろう？と考えもあつたけど、何より自分が異世界にいるという認識を不思議に思っただ。

どうして異世界にいると分かるのだろうか？よくある小説みたいな展

開で幼馴染に巻き込まれて尚且つ魔方陣を見て、言葉が分からなかったからだろうか。  
なんかこう…最初から分かっていた、と言い切れちゃいそうな感覚。  
でも食べ物美味しかったし、帰れなかったら勝手に探せば良いだけだものね。

そういえばなんで召喚されたんだろ。

いや完全に私のは巻き込まれただけなんだろうけどさ。

魔王の軍勢が襲い掛かってきそうだから、ここは勇者を召喚するしかないで踏んで、あの幼馴染を召喚したのかな。

それじゃあ、私が規格外の行動をすれば監視でも付けてくるのかな。あー…それはちよっと勘弁願いたいわ。

よし、目先の目標としては此処の世界の事なんて知らないから、とりあえず幼馴染と自分の安全の確保。

……というかあの幼馴染の様子なら、安全の確保なんて自分だけで良いんじゃないかと思えてきた。

「うん、寝よう」

翌朝。

起こしにやってきた侍女（みたいな人）にやっぱり何を言われたのか理解できなかったが、服を着替えさせられて扉を開けられた所、外へ出ると言う事だろう。

勇者が召喚されたという事は王様に会うのか。

とりあえず翻訳者がいないと私は何もできない。

謁見の間に着する前に幼馴染と半日振りの再会をした。

「おはよう、玲」

「おはよう」

「これから王様と謁見の間で会うんだってさ。緊張するよなー」

「へー」

幼馴染が何か言葉を返そうとした時、幼馴染が後ろから声を掛けられて会話が中途半端に終わる。

侍女が何やら恨めしそうな、憎悪が籠もった目でこちらを見てきたけどいつもの事だった。

ただ自分は無関係だと、空気のようにしていれば良いのだから。

謁見の間への扉が重々しく開いた。

あの後謁見で何を言ってるのか分からないからスルーしていたら、金魚のフン扱いされた。

酷くね？元はといえば幼馴染が私を巻き込んでくれた所為なんだから。

「倉庫に行って好きなものを持って行って良い」という幼馴染の口からその言葉を聞いた時、売りさばけば良いのと思った。

……そうだ、選ぶなら地味なものを選ぶでしょう。  
そしたら帰る方法を探しながら観光しよう。

昨日私達を召喚した女性は聖女と言われる人らしく、父親が先程謁見した人らしい。

幼馴染に落とされた聖女様は嬉しそうに幼馴染の横を歩いて私に牽制のようなものを仕掛けてる。

それに気付きながらも放置する幼馴染はやはり黒い。

今の所害がないから放置しているのだ、こいつは。

対してこちらはそのような牽制など慣れたもので……なんか段々この長い回廊に飽きてきた。

聖女様が何か言えば、どでかい豪華な扉がそこにあっただ。

こちらに来る前に見たような幾何学模様の魔方陣とは別のものが扉の前で現れると静かに開いていく。

中には目を瞑りたい程明るく灯された武器庫のような場所だった。

勝手なイメージではあるが、無造作に置かれているかと思っていたけど、剣や盾は壁に乱れなく立て掛けられていたり、手が触れる範囲内に横に置かれていたりしている。

灯りに反射する程綺麗に磨き上げられている武器の中に、装飾品もあっただ。

寶石店のようにショーケースに入れられている訳でなく、埃など知らぬかのようにとても綺麗だ。

きつと手入れをきちんとしてるんだらうな、結構大事にする人達なのね。

ぐるりと視界を巡らせていくと、金属などがあるこの空間の中に五六cm程の厚さもある深紅の本が置いてあるに気付いた。

意匠に凝ったような装丁だが、タイトルが何処にも書かれてない本に段々惹かれていく。

本に触れたらきつと精神世界へと連れ去られて契約するまで抜け出

せないのかな、と頭で考えていたが、やっぱり人間てのは欲求には勝てないわよ。

「あ、」

一瞬の内に風景が変わる。

ぐにやりと曲がった感覚がして、軽く酔った玲は立ち眩みのように足取りが覚束なかった。

しかしそんな今の彼女の目に映った風景はどこか趣のある場所だった。

たくさんの本が積み上げられた本のタイトルを見ていく内に、玲はハツとして気付く。

「この本読んだ事がある……？」

何千という本の中には絵本や文庫本など、これまで玲が読んだ本がずらりと積み上げられていた。

懐かしい感覚になってきた玲は、他にもないかと辺りを探り始める。ふと視界に入った見覚えのある本を手にしようとした時、ぶわっと光が溢れる。

余りに突然な出来事に驚いた玲は尻餅をついてしまった。

痛みにつろたえていると、長い黒髪をさらりと流しながら青年が恭しくお辞儀をしてきた。

「ご帰還なされた事を心より嬉しく思います、ディレンタ様」

「……は？」

どういう事だ。

というかディレンタって何。

私にはちゃんと名前があるんだけれど。

「ディレンタ様？もしかして記憶が……」

「ごめんなさい、私にはきっちり十八年間の記憶があるわ」

「しかしこの中に入ってくるにはディレンタ様のみあり得ないはず」

とは言われても、こんな美青年見たの初めて。

艶のある黒髪を後ろで束ね、異国の衣装を身に着けるもそれは彼に  
着る事を許されたかのようで、とても似合っている。

髪と同じ色の瞳が困惑したように開かれる。

こんだけ美人なら一発で覚えられそうだけど。

「とりあえず、名前乗ったらここから出して頂戴」

「えっ？もう行かれてしまうのですか！？あなたと二千年振りの再  
会なのですから少しは」

ええい黙れ！！

強引に出て来た所為なのか、肉体へと戻ってきたら体がふらついてしまった。

「一哉君に支えてもらったおかげで怪我もなかったが、あの女性の視線は痛かった。」

彼はもう既に選び終わっていたが、何故か一個しかもらえない筈なのにガントレットも貰っていた。

何だと。

勇者様だから？酷くね。

武器は白光に輝く剣らしく、寧ろ白光というより、ガラスのように透明で向こう側が透けて見える。

それが光に当てられて輝いて見えるけど、どこか腹黒い彼には性に合わない気がしてきた。

けど幼馴染が選んだものだし、口出しもしない。

そうそう、タイトルに書かれている『フェルマーの書』という文字は誰も読めないらしい。

あの聖女様でも読めなかった。

フェルマーっていうのはさっきの黒髪的美青年の事だ。

そして物凄い展開があった。

なんとこの国の言語がいきなり理解できるようになったのだ！

フェルマー曰く、この世界の何らかの力……つまり魔力が宿った物に触れれば理解できるらしい。

じゃあ何で私にあの指輪をくれなかった。

『従者扱いされたからではないでしょうか？』

こいつさっきの事恨んでるわ。  
口調が柔らかくない。

「では、早速魔力値の測定へと参りましょう、カズヤ様」

ああはいはい、私は無視ですか。

女の嫉妬なんぞに付き合ってられっかという心情にフェルマーが同情してきた。

余計なお世話だったの。

「玲、行こうぜ。次は魔力と属性の測定だつてさ!」

さっき聞いた、と返したが聖女様の御声とやらでそれは掻き消えた。そういえばさっきフェルマーに言われた単語が気になって仕方ない。測定を行う場所まで向かう間にフェルマーに聞く事にした。

『さっきの私がディレンタって、どういう事かしら?』

『記憶が欠落していらっしやるならば、もしかすると御主人はディレンタ様の因子を継いだ存在なのかもしれません』

異世界出身なんですが、と言いたくなるのを抑えて疑問に思っていた事を聞く。

『その、ディレンタの因子を継いでいたら何か起こるのかしら?』

『属性は闇でしょうね。魔力も神と言われても可笑しくないほど保有しています。この量は人間だと死んでしまいますから』

いつの間にか人外になってました。

母よ、父よ。

私が一体何をしたというのでしょうか。

『やはりあなたはディレンタ様なのです』

違う、私は影宮玲よ。

愛すべき母と父の子だ。

ディレンタなんて知らない。

私はそんな存在じゃない。

「では、これから魔力と属性の測定を行います」

「これはどうすれば良いんだ？」

「はい、手でこの魔珠に触れて頂くだけでよろしいですわ」

「へえ……」

魔珠と呼ばれた球体は透明な水晶体のようだった。

一哉君が魔珠に触れた瞬間、一気に輝きが増す。

辺りを飲み込む程に輝く柔らかな白い光に周囲にいる人達が呆然と見つめた。

「素晴らしいですわカズヤ様！光の属性だけでなく、基本属性もその身に宿す貴方はやはり勇者の素質があるのでしょう」

「ありがとう、レニア」

あれ、初めて聖女様の名前を聞いた気がするんだけど……そうだよ  
ね、自己紹介すらされなかつたし。

それって人間として失礼だと思っただけ、高貴な方は何考えてん  
のかワカンネ。

「ほら、玲もやってもらえよ」

正直言つて、闇だつてバレて迫害されるの嫌なんだよね。

勝手に召喚した挙句、何でそんな事されなきゃいけないのよ？つて話になるじゃない。

何その理不尽な話。

巻き込まれて来たんだから、私だけ帰してくれないの？

まー今帰しちゃったら幼馴染くんにも帰られて困るだろうし、仕方ないよねえ。

『幻術などもお使いになられます』

ふうん……？それはいい事を聞いた。

世界の情勢が分からない今、闇属性なんて怪しさ満載のこれをヒミツにしておくのは悪い事ではないと言えるだろう。

『フェルマー、私の属性を火にきなさい』

『生物の属性を変える事は出来ないのを承知で？』

『お前は黙つて幻術を使い、私の魔力の偽装と属性を火に変えなさい』

『な、なんて傍若無人っぷり……』

フェルマーとの会話をしながらも、水晶に手を翳す。

文句は言いながらも、フェルマーって本当に良い奴。

おっと、赤く煌々とゆらめく炎に思わず口角が上がってしまったのを抑えなくては。

「まあ！これほどまでの炎を……でもカズヤ様の方が魔力は上のようでございますわね」

当たり前でしょう、ウチのフェルマーが本来の魔力を偽装している

んですから。

という心の声なんて聖女様は全く知らないのに、彼女は自分のように鼻を高くしていた。

あの後ぐったりした様子の幼馴染くんを見た聖女様は、もう夜も近いと言って彼の背中を支えながら豪華な部屋から出て行った。

出て行く際、嘲笑っていたのを私は見ていなかったけど知っているんだぞ。

侍女さんに頼もうと思ったんだけど、面倒だからフェルマーに任せて部屋に戻った。

本っ当失礼な人間だよーあの聖女様。

早速部屋に入ってやった事といえば、フェルマーに頼んで幻術で偽装工作。

よく小説とかである監視とか本当にやられたら気色悪くて嫌だし。

『さてフェルマー、此処はなんていう国が分かる？』

『此処はヘレーネ教団総本山であるヘルラント。まあ国じゃないです』

『中立国？いや、自治区かしら？しかしまあ教団が此処まで資金があるとは……』

『この大陸は資源が豊富ですから』

フェルマーの話曰く、資源が豊富だけでなく国同士の争いが全く無く、この教団は大陸一でかい国とそれなりにパイプもあるらしい。

『君はあんな所いたにもかかわらず今の世界情勢を知っているというのか』

『私が知らない事があると思っっているのですか、御主人』

……こいつ、自分が知ってないと気が済まない性格じゃだろうか。  
とりあえず知識があつて困る事はないが、こいつから教わるのは少  
し嫌だな。  
自分で学ぼう。

翌日からどうやら訓練が始まった。

と言っても一度幼馴染と聖女様と他の何人かと会って、騎士みたいな人に図書室に向かえと言われたくらいだからまともな訓練を受けられるのは幼馴染だけなんだろうけど。

勿論その幼馴染は聖女様と共に訓練場へ。

他の人も皆女性ばかりで、幼馴染を困うようにして行った。

もうハーレムになってるんだね……なんて思いながら、図書室に向かおうとした時だった。

「そこのお前、レニア・フォーゲルを見かけなかったか？」

「レニア様でしょうか？ええと確か……」

不意に後ろから掛けられた声の正体を知ろうと身体の向きをそっちに変える。

そこにいたのは幼馴染と同類と言え、私にとっては忌避すべき存在つまりイケメンだった。

どうして話し掛けられたんだ、と思いながらさてあの女はどこへ行ったか、と考えてはたと思いつく。

そういえばこの教団にいるものは皆聖女様と呼ぶのに、目の前の男はフルネームで訪ねてきた。

立ち振る舞いとかそこら辺の人とは違うし、なんだか華やかしいし……もしかして結構な御偉いさん？

『その可能性は有り得ますね』

『つかあの口ぶりはなんだっつの』

お前ってなんだよ。

でも心の声はしまったまま。  
口調は上品に。

「確か訓練場の方に向かわれたと思います」

「訓練場に？」

「先日、勇者様が召喚されてご一緒に付き添われているみたいなんです」

「そういう事か。済まないな、足止めさせた」

「いいえ、とんでもございません」

謎の銀髪美青年の背中を見送りながら図書室へ向かおうと体を反転させる。

背後から聞こえた「あのクソ女何処で油売ってやがる」なんて、私八聞イテイナイ。

でもあの綺麗な色の髪だったのに、アホ毛（っていうか跳ねてるの？）が酷かったな、そーいや。

図書室に入って、異世界でもやはりこの空間は変わらないと知り、テンションが上がる。

この閑静さが私を癒すのだ。

そしてあの幼馴染が起こすトラブルから回避できる空間でもあるのだ！

人の気配が全くしないこの空間で、集中して取り組めるのは嬉しい。いつも妬みとか見下した目で見てくるあの聖女様に今なら感謝の言葉が言えるだろう。

よし、読むぞ！と意気込んで本のページを捲る。

「……………」

そういえば言葉は分かっても文字が分からないんだった。  
がつくり頂垂れる私に、フェルマーがとんでもない言葉をもらす。

『現代ティネルダ語は読めませんが、私の力で古代語ならば読む事が可能です』

いや古代語読めてもねえ……近代の歴史とか現代の国事情とかあるじゃない？

そういうのを一応頭に叩き入れておこうかと思ったのだけど、まあ仕方ないわよね。

それに一昨日ぐらい前に文字の習得って考えていたし、言語がなくなっただけなんだから簡単よね。

まず文字を覚えるには絵本が良いだろう。

私達も絵本を読んで覚えた。

そこからハイペースで単語を覚えれば問題ない。

『フェルマー、幻術で私の分身を創りなさい』  
『御意に』

さあ、ここから出るぞ。

身なりも上等でとても美しい女性が、働いている本屋へとやってきた。

遠目でも分かる程肌はとても綺麗で、日焼けなどした事もないような……そう、まるで深窓の令嬢。

すっと細く高い鼻、そして長い睫毛が茶色の目を影で覆う。

真剣に本を読んでいる眼差しが、近寄らせない雰囲気を漂わせている。

細い指がとても女性らしく、彼女が本を捲る度に綺麗な所作で動く

から目が全く離せない。  
長いブラウンの髪が陽に当たって神秘的に映る。  
なんと美しいことか。  
思わず恍惚の溜め息が出る。

絵本読んでるけど関係ない。  
立ち読みで、全く買う素振りが無いけど問題ない。  
彼女がいるだけで客が入ってくる。  
そう、さっき店長が呟いてたんだから問題ないだろう。

「（ああでも、婚約者とかいるんだらうなあ……）」  
夕方になると彼女は帰っていった。  
朝から夕方まで立ちっぱなしだったというのに、疲れすら感じさせない足取りで颯爽と帰っていった。  
その所作もまた美しく、思わず常套句を言うのを忘れかけていた。

「あ、ありがとうございますー！」  
おお、ついに話しかけてしまった。  
来た時は緊張で言えなかった。

「また明日来ますわ」  
声に振り返った彼女は微笑みながらそう宣言した。  
真剣に読む表情しか見てなかったからか、にっこり笑う彼女の顔に  
顔が熱くなる。  
可愛い。  
ただその一言に尽きる。

だらしない表情を見た店長にからかわれるまで、俺はそこでずっと彼女の背中を見送っていた。

昼に古本屋を早くに見つけられたため、夕飯の時間までそこで絵本を読み通してきた。

何回も読み、フェルマーと共に文字を覚え、つたないながらも思い出しながら紙に書いていく。

どうも英語に似たような文字だったため、覚えるのは至極簡単だったが少し似ているとなるとどうしても知っている方が出てきて邪魔してくる。

だがフェルマーは全く知らないから、間違えそうになるとちゃんと伝えてくれるおかげで一日の内にアルファベットに似たこの世界の文字をマスターできた。

あとは単語を覚えていくのみ。  
早々に就寝した。

あっという間に二週間が経った。

というのも、殆ど何か問題が起こる訳でもなく、一週間は文字と歴史の勉強。

歴史は分からない部分はフェルマーで補うが、なるべくならば自分で知りたいもんだ。

あとの一週間は魔術の訓練に励むだけの期間だったから、別に言わなくても良いか。

異世界人である私と幼馴染は、魔王を倒せと言われている。

幼馴染の特訓も終わり、後は魔王を倒す力を各地で見つける為に旅立つだけだ。

つか何で私達なんよ？あの時話分かんなくてスルーしてたけど、みんなの他人の尻拭いてやってるだけじゃない。

自己犠牲精神？何それ、おいしい？

命がけのボランティア活動なんて、そんなものやりたくないわ！

『御主人、そろそろ……』

『そうね、さっさと行かないとまた小言でも言われそうだわ』

これから港がある国へ行くらしい。

この教団は海側に面していても山脈があるおかげで、わざわざ港がある国に行かないと大陸から出れないんだと。

そして船に乗り、他の大陸へと向かい、魔王を倒す手段を確実にしていくらしい。

でも私は殆ど話を聞いてなかったし、聞く気もないでまあいれば良いかってぐらい。

本当の所、使えないけど異世界の人間だしっていう理由でどつかのお偉いさんの夜伽にされそうだ。

そんな状況にならない事を今後も祈りたい。

とまあ、足手まとい扱いではあるけれど、世界を巡れるのは楽しみでもある。

「では皆さん、準備はよろしいでしょうか？」

聖女様が素晴らしい微笑みを携えながら出発を促す。

聖女様と幼馴染の一哉君だけでなく、他数人がどつかの部屋に集合していた。

一哉君なら何人かと話しているんだろうけど、私は聖女様から図書室に閉じ込められてたからあとは全然分からないのよね。

だけど一哉君も知らない人がいたらしく、聖女様のはりきっていた。

「まずは騎士団長、お願いしますわ」

「はっ！私はヘレーネ騎士団団長ミラ・ライガルと申します、以後お見知り置きを」

金色の髪が目立つ若い人っただけしか印象が出てこなかった。

つまるところ、美女でしたーはい次。

多分、この人も一哉君のハーレムメンバーになんだろうね。

「ところでリーダーが加わっても平気なのか？」

「はい、彼女がこの旅に加わっている間はライル副団長が代理を務めます」

「紹介に与りました、騎士団副団長ライル・ディーゼルです」

女性の騎士団長さんだったから、副団長もって思ったら普通に男の人でした。

はいはいイケメンですねー。

「そして私、レニア・フォーゲル、ヘレーネ教団所属の巫女です。以上が我々ヘレーネ教団ヘルラントからのメンバーです」

やっぱり自分の事を聖女だなんて言わないよね。

てか、え？他にもどっから来るの？

と思つてたら、タイミング良く扉からノック音が聞こえ、優雅に男女1人ずつ部屋に入ってきた。

銀髪の男性が聖女様の前で止まる。

聖女様が軽くお辞儀をして挨拶を始めた。

「この度は我々ナディール勇者一行と共に同行してくれる事を有り難く思います」

「こちらこそ、勇者と共に世界の敵でもある魔王軍を倒せる事をとっても誇りに思います」

その挨拶の間にも、濃紫の髪の方は頭をずっと下げたままだった。

『そつえば、この人って二週間前に会ったよね。あのクソ女どこだよ？って言ってた人』

『そうですね、こんな会話バレたら首刎ねられそうですね』

「私は隣国のエレヴァン王国皇第一が子息、クレイ・ティエラ・A・エレヴァン。貴公らと共にナディール勇者一行として旅に同行する事になった。こちらは私の信頼できる臣下のレティだ」

「初めまして、皇室親衛隊隊長レティ・ベレッタです」

あの銀髪のアホ毛がぴょんぴょんはねてた人は皇子様だったようですねー。

さっきの頭下げてた濃紫の人は隊長さんみたいで、一見礼儀正しいんだけど、なんか冷徹って感じがするな！。

異世界でも親衛隊って皇族の私兵なのか。

そしてメンバーが豪華だ。

勇者様と聖女様に教団の騎士団長、そしてその部下2人（どっちも女性）に隣国の皇子様とその親衛隊隊長がいれば問題ないと思う。

でもまだ知らない子が二人いた。

何処の国の子だろ？

「じゃ、次は僕達だね」

「はい、お願いいたします」

「ギルド国家アヴァンドールから派遣された者です、僕はロス」

「右に同じく、僕はトス」

ロスと名乗った少年は白い髪で、トスは正反対の色をした黒い髪だった。

双子みたいで、二人とも同じ服を着ていた。

杖も色が違うだけで形状は変わらない。

なんか二人してりんごみたい髪型してるし。

「では最後に勇者様、自己紹介のほどを」

そういった聖女様の視線はやっぱり一哉君でした。

ねえ、やっぱりこの聖女様人として軸がぶれてんだと思う。

別に勇者やりたい訳じゃないけど、今私の立場は勇者（仮）なんだから少しは礼儀ぐらい持ったらどうなのよ？

「御主人、何処の世でも聞かない人間はいるのですよ」

「そんな人生悟った事聞きたくないわ」

「俺はカズヤ・サイトウ。職業は勇者みたいで、年齢は18歳、好きなものは海老と豚肉と、嫌いなものは……」

「あのカズヤ様、そこまで言わなくても良いんですよ……?」

「へ? ああ、ごめん!」

「い、いえ!」

そういや一哉君は緊張すると今までの性格が変わって天然さんになるのよね。

余計性質悪いわ!

「で、では最後に自己紹介をお願いします」

「がんばれよ玲」

なんだって君は自分の番が終わったからってそんなリラックスしているのよ?

「レイ・カゲミヤです。今後ともよろしくお願いいたします」

まあ、その今後がいつまでか知らないけどさ。

ギルド国家アヴァンドールに着くと、すぐに船に乗ると言われてこの街を楽しむ事なく陸地から海へ。

魔王は既に復活している、っていうのは噂話にしか過ぎないけど、活気ある街でもそれなりに重い話題として話されてるらしい。

大国と言われるファネスの軍力に魔王一人が匹敵するほどだとかそんな噂話もしてた。

そのファネスっていうのは最近出て来た新興国で、技術力も申し分ないらしく、三大国としてカウントされてる。というのも歴史の本からだ。

こういうのもあるからある程度勉強しておいて助かったわ、本当。

そして私達は今、船に乗ってこのナディール大陸から隣のニヴァーナ大陸に向かっている。

でもね、船に乗る前に船頭の人に「今日は嵐が来るかもしれない」って言われてたのよね。

快晴なんだけどなあ……でもここの天候なんて知らないからここの人の言うとおりにするのかな。

と思ったらあの聖女様、無理矢理船出せって言いやがった。

「レニア、嵐が来るって言ってるんだから、今日は宿屋に……」

「大丈夫ですわカズヤ様。私、未来を予知する能力があるのです」

もう既にこの人がごり押しする時点で嫌な予感しかなかった。

晴れてたのが、今じゃ嵐がこの船に近付いてる。

何が予知能力あります、なのよ。

……もしかして本当にやっっちゃうの？ 殺る気なの聖女様？

「レニア！」

「も、申し訳ございません！ですが、すぐにでも治まるかと……っ」  
強く吹いていた風に乗って降ってくる大粒の雨が凶器になってきた。  
今すぐ着替えたい。

一哉くんは聖女様にすすめられて制服から勇者っぽいのに着替えているけど、私に用意された服はどれも裾の長いもので動きにくいという理由で制服を着てた。

2週間の間はずっと借りてただけで、びちょ濡れになってもこっちの方が動きやすいと思う。

そろそろ目も開けられなくなってきて、後は船員さんに任せて服を着替えようと思って船室に向かおうとした。

「聖女様……？」

「あなたにはここで消えていただきます」

行く手を阻むように聖女様が杖をこちらに構える。

あなた本当に殺る気ですか。

「御主人、危険です！」

「リヴァイアサンに飲み込まれなさい！彼の者を吹き飛ばせ  
インドフル」  
ウ

鈍い痛みが肩にきて、聖女様の歪んだ顔が私を睨みつける。

海が私が落ちてくるのを待ち遠しく思いながら待っている気がした。  
視界の隅で一哉君が手を差し伸ばしていた。

全てがスローモーションに動いている。

嗚呼、やっぱり！一哉君、手綱ぐらいきちんと握ってなさい。

恋する乙女の暴走度なんて凄まじいんだから。

「ツレニア!!」

「は、はい!!」

「何故玲を突き飛ばした、彼女に嫉妬したというだけでお前は海に落としたのか!」

「も、申し訳ございません……」

「俺に謝るな、彼女に謝れ。……もっとも、あいつが生きてたらの話だけだな」

自分がやった事に反省し、項垂れる彼女を見て少しの罪悪感が浮かぶ。

けどそれはそれで、これはこれなのだ。

彼女がやった行いは、信頼を失くすのに相応しい。

少なくともこれは一哉からの主観であって、当の被害者である玲はどう思っていたのかは分からない。

生憎とあの場面を見ていたのが一哉とレニアだけだったこともあり、今は嵐が治まった青空の下、話し合っている。

レニアはただ謝罪の言葉しか言わない為、一哉が一方的に喋っているだけだが。

一哉の中でも言いたい事は沢山ある。

しかしそれを抑えて、溜め息の後に言った。

「玲の事は、嵐の中行方不明になったと言おう。それで良いな?」

「……はい」

どこか確信があった。

生まれた場所は違えど、双子のように育ってきた自分と彼女。きつと生き延びている。

今自分がやるべき事は引き受けた使命を貫き通すだけ。

片割れならばいつかまた、出会えるはずだ。

さざなみを聞きながら目を覚ます。

眩しい太陽が目に入ってきて、耐え切れず顔を背ければ砂が直撃。

「ぶはっ！」

思いきり身体を起こす羽目になって良かったのか悪かったのか、意識がはつきりしてきた。

もうちよつとだらだらしたかったんだけど……なんか日差しが痛い。起き上がって周りを見ると、どこかの南国の島みたいだった。

目の前は先が見えない程の森林、後ろは綺麗なターコイズグリーンの海。

「フェルマー、地図」

ブックホルダーから取り出した本は全く濡れてなかったけど、まあフェルマーだし。

適当に開いたページにはこの辺り一帯の地図がじわじわと写りだした。

見たところ、森を抜けるしか町に出れなさそう。

あれからどんぐらい経ったのか、今何時か分からないから陽が暮れる前に町に行きたい。

波にさらわれていた身体はだるく、こんな状態で敵に襲われたらひとたまりもないだろうね。

ちよつと眠くなってきたのを堪えて足を動かした。

「はぁ……なんかじめじめしてて気持ち悪い」

べつとりと肌にシャツがくつつく。

徐々に体力が蝕まれていくおかげで足の歩みも遅くなっていく、はずなんだけど。

足場が悪いこのジャングルを1時間歩いてても疲れないので、これまた異世界補正值？

なんて考え事してたら雨が降り出した。

スコールに降られて、最悪だと思いながらブックホルダーを傘代わりにして雨宿り出来る場所を探して走る。

ブックホルダーには図書室で見つけた水捌けの魔方陣が書いてあるから濡れても全く問題ない。

と言っても視界がはつきりするぐらいで服とか濡れちゃうんだけどね。

しかも走る度に跳ねる泥が煩わしく感じるし靴はショートブーツだから走りにくい。

「見えたわ！」

緑の中にちらほらと見えてきた白い建物に自然と足は速くなる。

つつい気を取られていた私は背後からやってくる気配に気付けなかった。

『御主人！敵が』

「え？」

振り向いた途端、頭を誰かに殴られて気絶してしまった。

すっきりとしない目覚めの所為で瞬きは遅く、目を閉じる時間も長い。

ぼやけた視界をどうにかすべく目をこすり、はっきりさせてから起き上がる。

『おおおお……！お目覚めになられたのですね、私はもうこのまま目を覚まさないのかと心配で心配で……！！』

「朝からうつさい」

『申し訳ございません。ですがこの気持ちは嘘偽りなくですね』

『その気持ちは痛いぐらい分かったわよ』

窓を見遣れば朝陽が差し込み、鳥の鳴き声が聞こえる。

昨日気絶させられた時がもしも午後なら、半日近く寝ていた事になる。

海に投げ落とされた疲れもあつたんだろうか。

段々と目が覚めてきた事により、周囲に目を見遣る余裕も出て来た。

ダブルサイズはありそうなかいいベッドで寝ていたようだった。

部屋を見回しながら、魔力で精製したコームで髪を纏める。

長いドレスのような寝巻きに着替えられていたが、すぐ近くにあったクローゼットの中を探ると、綺麗な状態で制服一式が掛けられていた。

裾が長く邪魔な寝巻きよりかは制服の方が良いと思う。

五分と掛からず着替え終わり、ブックホルダーを腰に取り付けフェルマーの書を取ろうとした時だった。

軽いノックと共に声が掛けられる。

「おはようございます」

恭しく頭を下げられながら挨拶されたおかげで、つられてこちらも頭を下げた挨拶を返す。

まるでオウム返しのようなようだ。

「朝食のご用意はできておりますが、いかがなさいますか？」

「ぜひ、いただかせてもらいます」

「畏まりました。屋敷の主も一緒ですがよろしいですか？」

「そこでどういった事か、聞かせていただけるのかしら？」

「勿論でございます」

『フェルマー』

『はい』

『次、しくじったら置いていくわよ』

『っ！？そ、それだけのご勘弁下さいませ！！』

念話だけど、フェルマーが土下座しながらそう言ってくるイメージが浮かんできた。

別に一枚一枚紙を破って火の中突っ込むぞって言っても良かったのだけど、こちらの方が効くだろうと思っただら……効きすぎだったみたいでまあ灸を据えるのに丁度良かったかな。

「私はブレラ・フォン・エチュード伯爵。君を保護したのは私だ、随分と手荒い真似をしてみました」

「いいえ、伯爵様のおかげで私はこうして立派な屋敷で目を覚ませた事、心より感謝致します」

『こいつの本音を読み取れるかしら？』  
『本音とは言わば心の闇。読み取れないはずがございません』  
『あとこれはついでで良いわ。屋敷からの脱出経路とギルド国家への経路をお願い。私の魔力を存分に使いなさい』  
『御意に』

大体こういう人好きの良い笑顔を浮かべる人間は本当のお人よしか、利益目的の人間に分かれやすい。

こりゃ本当に夜伽にされちゃうのかしらね。

まあそんなもんになれる前にここから逃げ出してやるけど。

「調子はどうだい」

「はい、とてもよろしいですわ」

伯爵が何も手を付けていない事に気付いて食べると薦める。

勿論伯爵は貴族らしく上品に食べていく。

何か入ってるかもしれないのに薦めるっていう事は、気の利かない人間、か……？

だとしたら随分と詰めの甘い人間なこと。

利益目的ならもうちよい人を信頼させて騙させる方法でも学んどいた方が良いんじゃない？

「本題に入ってもよろしいでしょうか」

「ああその事だったね。でも今はとにかく食べなさい」

「はぐらかすという事は何かあるんでしょうね」

「何か、とは何だね？」

「そうですね。例えば……毒とか」

ぴくりと反応した伯爵に、思わず心の声でツッコミをいれてしまっ

た。

いやダメだろそこで反応しちゃ。

本音が結構駄々漏れだった面、まあ意表は付けたけどさ。この世界、閉心術ってないのかしらね。

まあこれは某魔法学校の話だから止めておきましょうか。

「何故、その料理に毒が入っているとでも？」

「あら。そのような事はおっしゃっていませんが？」

ああやっぱり朝から水を飲まないのは辛いなあ、とそこで初めてテーブルの上に置いてあるものに手をつける。

グラスの中に注がれた水を一気に嚥下し、一息を吐く。

ん？なんだか口の中から食道辺りに掛けてびりびりする。だが数秒経てば治まった。

ふむ、どうやら解毒効果が出来ているようだ。

魔力が多いとイイコトも多いみたいで。

「うっ……！？」

「おや？どうやら間違った選択をしてしまったみたいだな」

どんな毒の効果も知らず、適当にベタな演技をしていると、伯爵は呆気なく本性を現した。

床にひれ伏す私の元までやってくると、彼は卑しい笑みを浮かべながら見下ろしてくる。

「君はとても美しい。本当ならば市場に売りたい所だが、特別に我が国の公爵様の側室にしてやろう。どうだ、素晴らしく名誉な事だろっ？」

「それではあなたは晴れて侯爵、ですって？」

「どういう事だ……？神経毒を飲んだはずでは！？」

はいはい、うるたえてるのも良いけどさ、さっと持ち直せて「その貴族だろう。」

靴で歩くような場所で寝そべるのは好きじゃない。すぐさま起き上がって伯爵の動きを影で縛る。

「な、何を……!!」

「その、側室の話？ だったかしら。いつそ伯爵様がなさればよろしいかと」

「はっ!？」

じわじわと姿形を変えていく伯爵が茶髪の美女へと変化していく。こいつの反応が見れないのが残念だけど、運の神よ、こいつを使って楽しんでください。

「この方でよろしいか？」

こくり、とただ頷くだけの伯爵に、御者は何も言わずに身なりを整えた茶髪の美女を連れて屋敷からさっさと去る事にした。

馬車が遠く離れていく事、誰も見ていない事を確認するとエチユード伯爵から茶髪の女性へと変わる。

『楽しめると良いわね、伯爵様』

『そこまで仕返しなさいますか……』

『だって、ねえ?』

フェルマーに本音を読ませたのと、記憶を読んだ事で大方どうして私がここにいたのか分かった。

あの伯爵は何者かによって唆され、私兵を使って私をここまで連れ

てこさせた。

そしてその何者かは私の特徴を話していて、且つそいつは私を狙っているという事だ。

何者か……その公爵様を指してるのかしら？

まあ今後気をつけていても損はないだろう。

それと伯爵の屋敷から小振りの宝石を二つと、少量のお金と外套をくすねさせてもらった。

こちらに帰ってきたときに取りすぎて気付かれても嫌だし。

帰ってこれるかどうかなんて知らないけど。

坂の上にある屋敷から、街を眺める。

そこそこ良い暮らしが出来ているようで、建物は立派だった。

なんかあの伯爵には悪い事しちゃったな……でもこれはこれで、

あれはあれだし。

「それもどうでもいい事ね」

外見というのは時に重要だ。

油断させるならば娼婦の格好も良いだろう。

女というのを隠すのであれば、肩幅を広く見せて顔を隠してしまえば良いだろう。

ついでに女性らしいラインを隠せるように二つぐらいサイズがでかい服も着て。

まあ何が言いたいかっていうと、服選びって大変よねって事。

「お客様は旅の方なんですか？」

「ええまあ」

「それでしたらこちらなんてどうでしょう？」

可愛い店員さんが差し出してきたのは腕の裾がやたらと広く、首元まである上着だった。

かれこれ動きやすそうな中で気に入った女性服が見当たらなかったからこれで良いか。

ブックホルダーも新調する事にして、布から皮へと変える。

……つかなんだってあんな露出度高い服着なきゃならん。

あんな、背中丸出しのノースリーブみたいな着て寒い場所とか行けないわ。

外套と体を温める術をいくら使っても精神的に寒気が走りそう。

ズボンは呆気なく決まっていた為問題ない。

黒の短いズボンに黒タイツにショートブーツ。

「それだけでは怪我しないでしょうか？」

「そうかしら？……あとで防具屋でも行った方が良いわね」

人からくすねたお金で払っても何にも思わないって、帰ったら犯罪者になりそうだわ。

一通り買い物済ませ、港へと歩いていく。  
お金は無駄な物を買わなきゃすぐにはなくさないくらいある。  
けど、そういうのは無限にある訳じゃない。  
いつかなくなるのは目に見えている。  
その前に就職口を見つけられたら良いんだけどね。

あ、ちなみに防具は高くて手が出せませんでした。  
ここで私は無尽蔵？程ある魔力を使って足の防具を創りました。  
意外と軽い材質なのか、全く重くない。  
うん、良いね。

そんなこんなで港に着くと、船頭らしき男と大男が言い争っていた。  
「良いから船を出せつつつてんだろ！！」  
「だから、あなたは人の話を聞いてなかったんですか！？この近海には今リヴァイアサンがいて、容易に船を出せないんですよ！」  
「知らねえな。リヴァイアサンだかなんだか知らんが、俺のこの歩みを止める事は誰一人許さねえ！！」

『…………馬鹿なの？』  
『倒す自信に満ち溢れているからのようですね』  
『でも武器を持っていないわよ？』

そういえば、リヴァイアサンといえばあの聖女様が言ってたな。  
食われるーって言いながら突き飛ばされたものねえ。  
ん？リヴァイアサンってあの神話の？…………そんな事はどうだって良

いか。

船は出せない、いや出せ！というやりとりをBGMに、フェルマ  
ーの書を開いて地図を出させる。

運良く一哉君達の目的地であるニヴァーナ大陸に辿りつけたようだ  
った。

この大陸には新興国ファネスがあり、ここから東の方には首都があ  
るみたいだ。

この街ベルルカはファネスの地方都市ってところかしら。

『このまま首都行く？それともギルド国家に戻るべきかしら？』

「おい嬢ちゃん。アンタもリヴァイアサン狩りに行くのかい？」

「え？」

「ここに残ってるって事はそういう事だろ？ほれ、船に乗るぞ」

男二人が挟むように船へと連れて行く。

いつの間に討伐フラグ立っただ。

船まで行くと、さっきまで船頭と言いつ争っていた男がこちらに気付  
いた。

「あ？なんでてめえら女連れてきやがった？」

「親方、こいつも戦いてえらしくて」

「こんなひよっこみてえな奴が？くっくく………がっはははは！」

お？なんかすつげえむかつくんだけど。

まあ実戦経験はそんなにないからどうでも良いけど、強くなったら  
こいつを真っ先に潰しに行こう。

「良いぜ。てめえのその目、気に入った」

え、何この展開。

いや一番最初に戦ったのは確かに弱そうな獣系だったけどさ、いきなりこんな無謀なボス戦行っちゃう？

……まあダメだったら死ぬだけだもんね。  
そうそう死んでやるつもりはないけど。

男はにやりとしながら右手を差し出してきた。

「俺の名はスタイン。スタイン・アルフォードだ」

「私はレイよ。よろしく、スタインさん」

そう言つてスタインは豪快に笑つた。

「てめえ、魔術師か？」

「どうしてそのような事を？」

「見たところ武器を持ってねえからな。その本が媒介か？」

「ええそうね」

「珍しいな。魔術一本って事は相当な使い手か、はたまた駆け出しなのか」

「……そこまで器用じゃないのよ」

スタインからの話を推測すると、魔術師は杖だけでなく剣も持つてるって事だろうか。

護身用と言っちゃ難だけど、持ってないとそれはそれで危険って？でもこのスタインも武器らしいものを持っていない。

周囲にあるのかと思つたけど、見当たらないし。

彼の部下達とも言えるメンバーは全員目に付くんだけれど。

「あなたも持つてないようだけど」

「あ？ああ俺は特別なんだよ。ほれ」

そう言つて見せてきたのは右腕に着けられたごつい腕輪だった。金色に輝く腕輪の中心では碧色の宝石が取り付けられている。

「こいつはな、魔導具つて言われる中の戦珠つつ滅多にねえ代物だ。この中に武器が仕込まれてる」

「見せてくれないかしら？」

「ああ、良いぜ。見せるだけだがな」

眩い光の内に、それは具現化された。

スタインはそれなりに大柄だ。

それこそ二メートルはありそうな身長だが、それと同等ぐらいの大きさの斧が出て来た。

持ち手は金色に染まり、豪華な装飾の先には鋭い刃物がある。

刃の中心部には腕輪同様に碧色の宝石が取り付けられていた。

「それはどこで手に入るのかしら？」

「てめえも欲しいのか？がっははは！！この戦珠は世界に四つしかねえからな、諦めな」

そう言つて本当に見せるだけで、すぐにしまつてしまった。

……あの教団は辺境地にあつたから、戦珠はなかつたのかしらね。

いや、それにしても教団にしては色々物があつたような気がする。

それに一哉君が持つていたのがもし魔導具の類だったら、フェルマ―も魔導具なのかしら？

『どうでしょうね、私はあなた様以外の者にはそこら辺にあるような本と一緒にですから』

そうだとしたら、何故あそこにいたんだか。

リヴァイアサンを狩る前だというのに、天気は全くといって良いほどの晴れ。

そしてこの暢気な雰囲気は、普通の船旅だと勘違いしてしまいそうだった。

先程の船頭に対する怒鳴りっぷりからは想像出来ないほど、今のスタインは穏やかだった。

雷が轟き、黒雲による嵐が視界を遮る中、目標はその下にいた。リヴァイアサンは中国の龍のように細長く、そして海の中で自由に泳ぎまわっていた。

まるで私達の乗る船を歓迎するように。  
この場合、潰す勢いだらうけど。

「親方！前方に嵐が見えます！おそらくリヴァイアサンかと」

男の指した先を見ていたスタインが頷く。  
既に手にはあの斧がある。

「魔導砲の準備をしておけえ！！てめえら！奴と戦闘を始めるぞ！！」

声を大きく張り上げて指示を的確に出していく姿は、またしても迫力のある存在へと変えていく。

これで見えた目中年ですが二十代ですとか言われたら衝撃的だわ。

魔導砲と呼ばれたものが次に次に甲板に現れる。

主砲部分も準備完了、という声がすると、所々で続くように声が上がった。

「おう、てめえは後ろで援護を頼む」

「弱点は？」

「さあな。てめえで考えやがれ」

さっさと船首部分へと歩いていつてしまった。

次第に船は波によって横へ大きく揺れ出し、いよいよリヴァイアサンの目の前へと迫ってきている事が分かる。

『フェルマー、私の体を床と固定する事って可能？』

『私をなんだと思っけていますか？』

『本』

『えっ？いや、私はですね、』

「おい嬢ちゃん！ぼけつと突っ立ってんじゃねえ！邪魔だよー！」

「あら、ごめんなさい」

『足の固定と周囲を見ておいてね』

『調整はなさらなくてよろしいのですか？』

『あなたの力を借りたら意味ないでしょ』

こちらに気付いたリヴァイアサンが、右舷側から船体に突撃してくる。

大きく傾く中、スタインの部下たちが海に落ちるのを阻止すべく、術を発動させる。

スライムのような球体で、敵を閉じ込めたり衝撃緩和を目的にした術だが、魔力で範囲を大きくした為、全員落とさずに済んだ。

意外と範囲広かったのだけど、疲れはないわね。

一応無属性として発動はしているんだけど。

弾力によって弾かれたメンバーは驚きを隠せずにいたが、リヴァイアサンの尾が迫っている事に気付くとすぐに準備へ動く。

魔導砲がリヴァイアサンの胸を攻撃するたびに術式が浮かび上がってくる。

様々な色の術式が浮かび上がっても、穴を開けるような破壊力はなさそうだった。

それほどまで、リヴァイアサンの体は堅いようだ。

一方、船首部分ではスタインがリヴァイアサンの顔に向けて攻撃していた。

喰らいつこうとするリヴァイアサンに対し、スタインはあのでかい斧を片手で器用に扱い、痛手を与えていく。

船首部分に乗り掛かるように、腕でがちり掴んでいるリヴァイアサンの体を船伝いに拘束する魔術を発動させる。

無論、こちらも無属性として。

巨体の所為で全身を拘束する事は叶わなかったが、スタインにとっては好機だったようだ。

遠目からでも分かるように、リヴァイアサンの左目に斧が大怪我を負わせた。

青い血を噴き出しながら海の中へ逃げ込んでいく。

それでやられるならとつくに討伐できているだろうけど。

さすがに出てきてもらわないと攻撃が出来ない。

メンバー共々、嵐の中リヴァイアサンの登場を待つ。

雷の轟きだけが静寂を切り裂く中、誰かが叫んだ。

「来たぞー！後ろだー！！」

殆どのメンバーが船首へと移動していた所為で船尾にいたのは私だけだった。

固定を解除してもらい後ろを振り向くと、リヴァイアサンは船首の時同様、腕を使って乗り掛かっていた。

「！」

大口を開け、右目だけの睨みでも迫力は凄まじい。

死なないように精一杯の結界を張り、遠ざけるべく爆発の術を使おうとした時だった。

『スーシャは喰らえぬ。お前を喰わせる！』

口から魚の腐ったような臭いが周囲に蔓延る。

さすがに臭いまでは遮ってくれないらしい。

某最後の物語でもある臭い息ってステータス異常技だから、臭いも遮った方が良くも。

『この方をディレンタ様と知っての狼藉か』

フェルマーが例の黒髪美青年の姿で私の前に現れる。

半透明なのが気に掛かる所だけど。

相変わらず羨ましい限りの美貌で……ってそんな事今は考えてる暇ないか。

『ああ知つてるとも！ディレンタさえ喰らわば我が治世が始まるのだ！！』

……はいはいとんだ中二病ですこと。

ちなみに現実ではリヴァイアサンが咆哮をあげているようにしか聞こえない。

フェルマーと念話で話すように、頭に直接響いている感覚だった。

『フェルマー、もう良いわ』

目を瞑り逃げ出さない玲に、リヴァイアサンが勝ち誇る笑みを浮かべる。

スタインは喰われそうな玲に逃げると叫びながら近付くが、荒波の

所為で中々進めない事にイライラしていた。

半透明状だったフェルマーは既にいなくなっていた。

リヴァイアサンがゆっくりと玲の前までやってくると、口を大きく開け、そして。

「喋ってる暇があるのなら、さっさと食べれば良かったのよ」

大きく開ける口を閉ざすように、一本の黒い槍が雷を纏って突き刺さった。

その一本が合図だと言わんばかりに複数の槍が次々とリヴァイアサンの体を貫通させていく。

あまりの痛みに声を張りあげようにも槍が突き刺さっている所為であげられないもどかしさを感じながら、リヴァイアサンは船から離れ、その巨体を海面へと打ちつけた。

徐々に海中へと身を沈めるリヴァイアサンが見えなくなると、後ろから歓喜の声が上がった。

半壊気味の船で長い時間を掛けてようやく港に着いた。

動力源とも言える魔石が生きていても、船体が耐えられないという理由で風に乗りながらのんびりと帰ってきた。

またあの時のように海に放り投げられるのかと思っていた為、陸に足をつけた事に安堵の溜め息が出る。

すると、先にメンバーと共に船から降りていたスタインが足を止めてこちらをじつと見てきた。

じつと見られると歯痒い思いするんだよね。

単純に注目される事に慣れてないだけですけど。

「てめえのその本は精霊付きだな？」

「精霊……っていったら確かに精霊ね。ええそうよ」

「そういうのは大抵魔導具に括られる。この戦珠の一つ、ディアボロスの斧もそうだ」

『確かに、精霊のようなものを感じますが実体化は出来ないようですね』

ふうん……あれディアボロスの斧っていうんだ。

それにしても、さっきは名前すら教えてくれなかったのにな。なんかフェルマー関連で気付いた事あったのかな。

「てめえのは俺の持ってるものと違う。そいつは魔導具を持ってるから分かるのかもしれないがな」

ふむふむ、魔導具を持つものはそれに対して敏感、と。

そういえばさつき本を出したけどあの時は何も言っていなかった。  
それは力を引き出した場合なのかしら？それとも単に魔導具の力関係？

「普通の人間じゃねえよ。そんな化け物みてえな魔導具持ってる奴はな」

『化け物だつてさ、フェルマー』  
『いやあなたもそうですからね』

まあなんだかんだ言つてさ、テンプレだのどうのこうの言っじゃない？

でもそれって何も知らうとしないでただ目の前の事を眺めている感覚がするのよ。

ああはいはい、この展開ですかーって呆れてるだけ。  
ただ流されるのは好きじゃない。

それに、フェルマーがどういった代物なのか知らずに所持しているんだから少しは興味を持つべきよね。

もしかしたら元の世界に帰れるかもしれないだし。

この世界を旅して帰れば新たな価値観に出会えるかもしれない。  
まだまだ先は長いだろうし、帰る手段を探すついでに魔導具って何なのか、って探すのも良いよね。

「だけどあなたはそこまで私に言っておきながら敵意を持たない」  
「てめえには勝てねえ。これでも三十年はギルドやってんだ」

先程のリヴァイアサンを倒したおかげで航路は開けた。

人々が歓喜の声を上げながら、先に行ったスタインのギルドメンバー達へ群がる。

そんなメンバー達を見るスタインの目は親が子を見るようなものだ

った。

「俺には守るべき存在がいる。こんな所でやられちゃあ終いねえだろ？」

こっちの方が敵わないっつの。

悪態は心の声だけに済ませる。

大体化け物呼ばわりされたら迫害されるのかと思ったけど、スタインはそんなに器量の狭い人間じゃなかった。

なんと心の広い事か。

最近心の狭い人ばかりか見てた所為かな。

「……闇の魔術を使える奴ってのは珍しいんだがな」

「！ どうしてそれを」

「さつき普通に使ってただろ？どうだ、てめえ一人ぐらいなら養ってやれるぞ」

一応無属性として幻術を掛けていたんだけど、魔導具持ちだからばれるのかしら。

スタインの口ぶりからして、闇属性は希少種でも忌み嫌われる力ではないようだ。

ならばガンガン魔術使っていつても問題ないだろう。

今度は魔力が切れるまでどこまで行けるか。

「遠慮しておくわ。次会った時に今回の礼をしていただくけれどね」

「そうかよ」

スタインを見送り、何気なく空を見上げれば水平線の向こう側では既に太陽が沈んでいた。

橙色を追い出すように藍色と星が空を覆う。

「宿は絶望的かな」

『どうする？今日は朝まで起きてる？』

『一応あの魔獣と戦ったのですから、休まれては如何でしょうか？』

とは言われても、スタインのギルドが頑張ってくれてたから少し魔力の密度を上げるぐらいでトドメを刺す事ができたから疲れてないのよね。

うーん……やっぱり異世界補正值？

いやいや、現実的に考えてみようよ。

もしかしたらこっちの世界の重力が地球と比べて軽いだけなのかもしれないし。

それで体力云々の話がどうなるかって聞かれたら知りませんけど。

「あら？」

いくつかの宿屋を回っても既に満室状態で断られ、諦め寸前でようやく見つけた宿屋の前では若い男がゴロツキに絡まれていた。

「ぶつかっておいて謝りもしねえのか？」

「いや、俺ホント何もしてませんから！ぶつかってきたのはそっちじゃないですか」

うわ青年哀れだね。

ゴロツキに絡まれちゃったら相当口の回る人間か、腕の立つ人間じゃないやこちらの安全なんて保障されないよな。

とりあえず、やっと目星付いた宿屋の前で邪魔なんだよねえ。

はあ……お腹すいた。

見れば三人がかりでひよろい青年一人を囲んでいる。

中央の男が青年の前で肩を押さえながら睨み、青年の両肩にいる男二人が逃げ道をなくしている。

で、後ろには私がいる、と。

「ああ？オメーがぶつかってきたからこいつの肩がイカレちまったって言うてんだよオ」

むしろ筋肉もりもりじゃないっすか、その怪我を負った人。

いや、三人とももりもりだけど。

「慰謝料払ってくれよ、オメーの責任だぜ。こいつは俺らの大事なギルド員なんだからなあ？」

そうだね、その青年がもしぶつかってきてそいつが怪我したら医者の所に連れて行くべきだね。

うん、邪魔。

「言いがかりにも程があるだろ……」

「オイ！！何ぶつぶつ言うてんだ、文句ならこのオレ様に言ってみろよ」

その時、不覚にもお腹の音がこの辺りに響いた。

勢いよくこちらに目を向けたゴロツキがささず私を標的に捉えた。いやだつてさ、このゴロツキ達の所為でこの辺り一帯に野次馬の一人もいないのよ。

「なんだよ、嬢ちゃん。こいつの仲間か？」

「いやそいつは」

『いかが致しましょう?』  
『問題ないわ、手は出さないで』

「ええそうよ。その青年の仲間」

「話が早えや。こいつの所為でな、仲間が肩を脱臼しちまってよお」

「嬢ちゃんが金の代わりになってくれるってんならその男を許してやるんだがなあ……?」

下品な笑い声が耳障りなこと。

大方私を慰み物にしようとしているのかもしれないけれど。

街中だとどれだけ魔力使って良いか分からないから、術の範囲が狭くなっちゃうのよね。

「残念。それは無理な話ね」

「じゃあ仕方ねえな。力付くで付いてきてもらおうか」

一人の大男が一步近付く。

あーあ、範囲に自分から入ってきちゃった。

私は悪くないわよ!。

「そうそう、脱臼は一時間以上放置しておくで全身麻酔してから手術が必要って知ってたかしら?」

「はあ?何を突然訳のわからいっ!?」

「ぎゃあっ!?!」

「いでえ……いでえ!」

三人とも肩を押さえて地に伏した事に、青年が驚いた顔で宿屋の壁に後ずさる。

罾用に開発した、範囲を指定し入ってきた獲物に対して攻撃してこないように先手で攻撃できる術なんだけど、実は熊も相手できるよ

うに結構強く設定されているのよね。  
え？何が強くなって？そりゃ見れば分かるでしょ。  
人間なんだから、脱臼で済んでるはずが無いわ。  
骨折だったのが不幸中の幸いだったね。  
下手したらもげてたかも。

「くそっ覚えてるよ、女！！」  
「いてえ、いてえよ兄貴イ……！！」  
「うるせえ！黙って歩きやがれ！！」

まあなんとも小悪党の定番とも言える捨て台詞なこと。  
あ、ちなみに脱臼は一時間じゃなくて八時間です。

筋肉質なゴロツキ三人を見送る青年に声を掛ける。

「大丈夫だったかしら？」

「あつ、ああうん。助けてくれてありがとうな」

「どういたしまして」

「女の子に助けられるとは思わなかった。なんかすげえ情けない」

深い溜め息を吐いてしゃがみ込む青年の姿がかなり哀愁漂っていた。  
彼の立場を考えれば確かにそうだけど、空いてそんな宿屋の前であんな騒ぎ起こされたらね。

魔術は私の唯一の武器だし、そりゃ脅しも含めて報復するわよ。

「夕飯、まだ食べれてないのよねえ……」

はあ、とわざとらしく左頬に手を付け、いかにも困ってますアピールをする。

たぶんこの人かなりのお人好しで断りにくい性格かも。

ちらりと視線を這わせると、彼の尖った耳がぴくりと反応する。

「お、俺とで良かったら、一緒に夕飯食べませんか!？」

「あら良いの? あ、お金……」

「奢るよそんなの! 助けてくれたんだし、お礼はそれで良いか?」

「ええ結構よ。ありがたくごちそうになるわ」

よっしや、ただ飯ゲット。

幕間 01 (前書き)

サブタイトル変更しました。

## 幕間 01

故郷から旅立ってもうすぐで三年経つ。

旅をしている理由は簡単だ。

親父から人生の伴侶が出来るまで帰ってくるなとまで言われたから。俺、本当は戦うのとかすっごい苦手なのに。

一度適当に見掛けた女の子を連れて帰ったら家族にも怒鳴られるわ、女の子からは強烈なビンタ食らうわ……もう散々だった。

あれが俺の中で衝撃的過ぎて、真面目に探して早く帰ってやろうと思いきっかけになった。

だけど中々伴侶ってのは見付からないものだ。

その度に街から街へ行くから、戦わなきゃいけないんだけど……。

魔物相手ならまだ大丈夫だけど人は勘弁して欲しいとさえ思ってる。竜人族っていうのは力がありすぎて普通に殴っただけで人なら撲殺できる程だっけ聞いてる。

え？嘘だろって？いやいや、目の前で一軒家壊すシーン見てみ？

「この力がお前に受け継がれてる筈だ」とか親父、いらぬ事をよく言っただよなあ。

それでも兄貴や姉貴達は上手く制御できて、人生の伴侶とも言える人達を見つけ出していった。

あとは末っ子の俺だけ。

はあ……… いったいどんだけ掛かるんだろ。

人間のように早く年老いていく訳じゃないけど……

「いつてえなあ……… おい、兄ちゃん。聞いてんのか？」

「へ？」

見ると三人組のがたいの良い男が取り囲んでいた。

もしかしてこれ、絡まれたのか!?

「ぶつかっておいて謝りもしねえのか?」

「いや、俺ホント何もしてませんから!ぶつかってきたのはそっちじゃないですか」

ちゃんと避けたはずだった。

柄の悪い男に絡まれても、力が強すぎて一体どうなるのか分からなくて手を出せない。

どうする事も出来ないまま、俺はただこいつらが飽きて去っていくのをただじっと待っているだけだった。

「ああ?オメーがぶつかってきたからこいつの肩がイカレちまったって言うてんだよオ」

「慰謝料払ってくれよ、オメーの責任だぜ。こいつは俺らの大事なギルド員なんだからなあ?」

男は肩を押さえている男を指差しながら、俺の肩をみしみし言う程掴んでくる。

逃げ場が無いこの状況、最悪だ。

「言いがかりにも程があるだろ……」

「オイ!何ぶつぶつ言うてんだ、文句ならこのオレ様に言うてみるよ」

思わず口に出た言葉は運悪く男の耳に入り、更に力を込められる。内容が聞こえなかっただけマシか。

お金を払うから勘弁してくれ、と言いかけた時だった。

後ろから「ぐううう……」とお腹の音が鳴った。

誰だろつかと気になってごろつき共々音の方を振り向くと、少女が

一人佇んでいた。

「なんだよ、嬢ちゃん。こいつの仲間か？」

「いやそいつは」

「ええそうよ。その青年の仲間」

違うんだ、巻き込まないでくれ。

そう言い掛けた言葉さえ飲み込むような返しだった。

まだ成人していないぐらいの、か弱そうな少女は不敵の笑みを携えながらそう答えた。

「話が早えや。こいつの所為でな、仲間が肩を脱臼しちまってよお」

「嬢ちゃんが金の代わりになってくれるってんならその男を許してやるんだがなあ……？」

明らかにこいつらはこの少女を奴隷として売り飛ばすつもりか、何かしら手を出すつもりだ。

少女のようなエキゾチックな顔立ちはこちらでは見ない。

これからどうなるのか分からないのか、少女は屈する事がなかった。

「残念。それは無理な話ね」

「じゃあ仕方ねえな。力付くで付いてきてもらおうか」

ダメだ、その子は全くの無関係だろう！

止めに入ろうとしたら、もう一人の男に腕を取られ口を押さえられる。

あと少しで触れるという所で、少女は不意に何か呟いた。

「そうそう、脱臼は一時間以上放置しておくで全身麻酔してから手術が必要って知ってたかしら？」

男の隙間から見えた少女の顔はゾツとするぐらい、綺麗に微笑んでいた。

「はあ？何を突然訳のわからいっ！？」

「ぎゃあっ！？」

「いでえ……いでえ！」

緋色の瞳が細められた時、黒い何か横を通り過ぎたのを見た。

突然解放されたおかげで壁にもたれ込んだけど、ああ助かったんだなどどこか客観視している自分がいた。

コントロールが苦手な自分とは違い、少女はそれに長けていた。

ごろつき達は少女に恐れをなしたのか、すぐに逃げに走る。

無様な姿をさらしながら捨て台詞を吐いてどこかへ行った。

「大丈夫だったかしら？」

呆然と見送っていた俺のすぐ近くに来ていた少女は先程の冷たい微笑みではなく温かみのある微笑みをしていた。

緋色だと思っていた目は髪と同じ茶色だった。

あれは見間違いだっただろうか。

いやでも、そんな事はどうだって良かった。

一目惚れなんてしないだろ、と友人に吹聴してた自分が恥ずかしかった。

青年の名はアディア・クレズメント。

たぶん剣を腰に下げてるから職業は剣士。

ウルフヘアーのようなディープブルーの髪はストレートではあるが、頭頂部ではねておらず、全体的に重力に負けて落ちてきている。

少し天パが入ってる私の髪と比べて凄く羨ましいと思う。

垂れ目がちな空色の目がちらちらとこちらを見てくるのが分かる。

第一印象は青い、第二印象は好青年。

長く尖った耳はエルフなのだろうか？

少し中性的とはいええ、顔や体つきからして男らしく、間違っても女とは思わないだろう。

そこまでおしゃべりという訳ではないらしく、たまに話しかけてくる程度の会話。

それにしても久しぶりにゆっくりとご飯を食べれた気がする。

あの二週間、近くに一哉君がいても堅苦しい食事だったからね。

向けられるねちねちした視線ってさ、もう何年も浴びてる私からすればどうでも良いわけよ。

ただ食事中ぐらい一哉君を自由にさせてやれよって遠回しに一度言っただけで毎晩嫌がらせをしてくるって事は私の存在は邪魔だと仰りたい訳ですかー、と。

……じゃなきゃ私を海に突き落さないか。

どうせあの聖女様だから、自分の事を良いように言ってるだろう。

一哉君と行動を共にするのは私の精神的な意味でよろしくないな。

「レイは一人で旅をしているのか？」

「旅らしい事なんてしてないわ。昨日嵐に巻き込まれて漂流してきただけだし」

「すごい強運だな……。あれはリヴァイアサンの嵐だったのに」

あの嵐で大海原を渡る船を壊して丸ごと飲み込む、とはさすがに行き過ぎだと思っけど。

他にも複数体目撃されているがそれぞれ独立して生活している為、それほど脅威でもないらしい。

けどこういった他大陸との貿易を盛んに行ってる場所では一体いるだけで大きな損失を生み出す。

そっぴああのスタイン、最初は止められていたのにいつの間にか退治する話出てたけど何したんだらう？

脅し？いやいや、リヴァイアサン倒したくて脅すってどうなのよ。

「そっぴえば、今日リヴァイアサンが討伐されたって話聞いたか？」

「ええ聞いているわ。実際にあの場にいたし」

「いたの！？……もしかしてさ、嵐に巻き込まれた腹いせ？」

「あなたは私の事をそんな風に思っていたのね、心外だわ」

「冗談！冗談だから怒るなって！」

「知ってる」

「なんだ……」

それにしてもよく表情の変わる人だな。

興味深そうだったのが一気に焦りに変わり、分かった途端にほっと一安心するような表情。

別に本音聞かなくても問題ないくらい？

まあこいつが何やらかそっぴが、さっきのころつきので良い牽制になってるだらうし。

それにこう……なんか憎めない。

うん、これに限るね。

一室だけしか空いてなかったから同室だけど、宿泊費も払ってもらっっちゃったし。

「あのさ、ギルドに所属してないなら一緒にやらないか？」

「いいわよ」

「いやあの無理にとは言わな……本当か!？」

「ええ」

「早速明日ギルドの登録に行こう!……あ、やっぱりギルドの人に紹介状書いてもらった方が良いのかな……」

「どうして？」

「ギルドを新しく作る時に、最低でも設立から一年経っているギルドの人に紹介状を書いてもらうと優遇してくれるんだよ」

『うってつけの人がいるじゃないですか』

『……まあ良いか』

ギルド設立の紹介状がお礼なのは少し気に食わないけど。たぶん、この街のどこかの宿屋に泊まってるはずだから、夜の内にフェルマーに頼んで探してもらおう。

『って事で、ディアボロスの斧伝いにあいつに伝言をお願いね』

『御意に』

「誰か知ってる人いないか？」

「いるわよ。スタインって人」

「そうだよな、いないよな……っているのかよ!しかもスタインって、あのスタイン・アルフォード!？」

戦珠持ちでギルド歴三十年のベテランだったらまあ有名だろうな。

陽もすっかり昇った頃。

スタインに会うべく、彼が泊まっていた酒場兼宿屋に入る。仲間達と談笑して待っていたスタインがこちらに気付くと、仲間達は空気を読んで席から離れていく。

「よお、昨日ぶりだな」

「そうね。夜の内に伝達がいつてると思うんだけど」

「こいつから聞いてるぜ。ギルドをやりてえんだって？」

こいつ、と言って戦珠を軽く叩きながら、スタインはにやにやとしながらアディアと私を見比べた。

あーもう、そういう方面じゃないんだけど。

「良いぜ、紹介状書いてやるよ」

「昨日のお礼はこれでいいわよ」

「そうか？ だったらはりきって紹介しなきゃ、礼に合わねえな」

「よろしくね」

スタインは近くにいたメンバーの一人に紙とペンを寄越すように言うと、すらすらとあの英語に似た文字を書いていく。

待っている間、喉の渴きを潤すべくウェイトレスに水を頼んで彼と同じ席にアディアと共に着く。

どうして紹介状が必要なのか。

それはひとえにギルドという存在がこの世界の生活に殆ど密着している事から成り立っている。

討伐ギルドから鍛冶ギルド、商人ギルド、果てには料理やら占いだとか、私と一哉君の世界にもいたように、それぞれの専門を商売に使っているギルドが多い。

言ってしまうえば、そんなだけあるなら新米野郎は元あるギルドに入っただろうが収入が安定されるという事だ。

同時に社会経験も積める辺り、何処となく会社と似てる。

ギルドを設立する人は、ある程度の社会経験を積んだ者が独立するか、若くして自ら道を切り拓きたくてっていうぐらいだろう。

そして、その紹介状をどうするのかと言うと、”王の玉魔”セントラル・ドグマというギルドの管理をしているギルドに渡し、登録する際に紹介状を渡せば様々な特典がもらえる。

登録しなくても平気らしいけど、その場合は自分達から売り込みに行つて仕事をもらわなきゃいけない。

この”王の玉魔”セントラル・ドグマに頼めば仲介料として報酬金の二割は取られるがわざわざ売り込みにいかなくても仕事がもらえる。

とにかく仕事の幅を広げたいが為に、ギルドはこぞつて新米達を勧誘するんだと。

だからギルドに入りたいつて思つてる人も、”王の玉魔”セントラル・ドグマにギルド未所属として登録しておけばありがたく簡単に就職につける。

良いよねえ、元の世界じゃ就職氷河期なんて揶揄されて業種すら選んでる暇ないんだから。

ちなみに紹介状があれば優遇してもらえる内容は、それなりに力がある事を周りに示せて、ランクの高い依頼も受けられる事なんだと。ホーム拠点地と言われるものは相当じゃないともえならしいけど。

「待たせたな。これがそのお礼だ」

「どうもありがとう」

「おうよ。これからのためえらの活躍を期待してるぜ」

白い封筒に入れられ、蠟で封のされた紹介状を手にも席を立つ。

テーブルに空になったグラスとコインを置き、スタインに軽く挨拶してから宿屋から出た。

『紹介状の内容を確認し、妙な記載があつたら言いなさい』

『御意に』

「じゃあ紹介状ももらったし、首都に行くか！」

「どうして？」

「ファネスの首都だったら”セントラル・ドグマ王の玉魔”の支部があるんだよ。そこで登録できる」

「この街にはないの？」

「管理するのも大変って事らしいぜ？まあ良い訓練になるんだし、のんびり歩いていこうぜ」

「はあっ！」

横薙ぎに振るった剣がブチウルフの体を真つ二つに斬りさく。すぐさま他の敵に目標を決めて斬りに掛かっていくおかげで私の仕事は殆ど魔術で拘束させるぐらい。

正直ありがたいと言ってしまえばありがたい。

なんせ楽だからね。

五体いたブチウルフをもの数分で片付け終わり、素材を剥ぎ取っていくアディアに近付く。

「これでブチウルフの牙が二十九本、毛皮が十八枚って所か」

「合成に使うの？」

「それもあるけど、大半は売るかなあ」

地方都市ベルルカから歩き始めて三日が過ぎた。

徒歩で早ければ四日で到着できるらしいのだが、どうにも魔物とのエンカウントを楽しんでる所為で五日は掛かりそうだ。

「なあ、次から戦闘は任せて良いか？」

「どこか怪我したの？」

「うん、疲れた」

にへら、と笑いながら言っているが、全然疲れているように見えな  
い。

まあ存分にアディアの剣技は見せてもらったんだし、こっちもお返ししなきゃ悪いよな。

これでも共にギルドをやっつけていく仲間なんだし。

「良いわよ、後ろで休んでても」

「おう。お前の背中ぐらい守ってやるよ」

「それは結構な事で」

『前方から五体のブチウルフが向かってきます』  
『了解』

右手に魔力を溜め込み、ブチウルフが見えてきた辺りで地面に向かって掌を押し付ける。

幾何学模様 紫色の術式陣が光を放ちながら広がる。

二メートル程の大きい黒い狗が二体、術式から飛び出して真っ先にブチウルフへと向かっていく。

あまりに大きな敵が現れた事に、ブチウルフ達は恐れをなして逃げ出した！

……やべ、やりすぎたなこりゃ。

戻ってきた二体の狗はそのまま消える事なく目の前で伏せをしていた。

「クウン……」

「グルルル……」

「なあ、そいつらに乗って首都まで行っちゃいけないのか？」

指を指されても全く反応を示さない狗二体。

生物の体を模していても、意志は薄いのだろうか。

ある程度の動き以外は私の命令どおりに動くだけだし。

「素材集まらなくてもいい？」

「やっぱ歩いて行くか」

ぱん、と手を叩くと風にさらわれる砂のように消えていった。

五日目のたぶん三時のおやつぐらいの時に漸く辿り着いた首都の景色は遠目から見ても美しかった。

中心部から街の隅々まで流れるように行き渡る水と、白い建物が光を反射して輝いているように見える。

眩しいとは思ったが、まあそのうち慣れるだろうと思って気にせず足を動かす。

アディアと共に人に聞きながら、セントラル・ドグマ”王の玉魔”クリスタル・パレス支部まで無事たどり着けた。

「なー名前どうするー？」

「何でも屋で良いんじゃないの？」

「適当にも程があるだろ！」

「シモネッタ」

「何それ下ネタみたいだから却下！」

「メクラチヨンゴミムシ」

「名前にゴミとムシを入れない！よって却下！」

「ぬるぽ」

「ガッ　って何の話だよ！！」

おおッッコミすげー。

純粹に感激し、拍手を送っておいた。

「ゼエー……ゼエー……」

「お疲れ」

「お前が悪ノリするからだろ！」

「じゃあ”ラズリ・ステラ銀瑠璃の遊星”で」

「お、おお……まともなの出てきたな」

「けつてーい」

「やつとか」

すぐさまギルド登録用紙とスタインの紹介状を受付嬢に渡す。  
スタイン、疑ってごめんなさい。

「スタイン様のご紹介ですね。拠点地ホムを作ることが可能ですが、いかが致しましょう？」

まあ家みたいなものだろう、ホームって読んでるし。

この土地で仕事をしていくんだったら宿屋で泊まるより作ってもらった方が良さだろう。

ふらふらと旅をするんなら、宿屋だけで良いと思うけれど。

「どうする？」

「なあ……どうしよっか」

「作っておいても損はないですよ。この街は観光都市として有名ですし、皇帝様のお膝元ですし」

「だよ」

「それに、若いお二人のこれからの生活にぴったりの街かと」

またか、またこの勘違いきたわこれ。

これも利用すべき材料のかな、とりあえず一芝居売っておく。  
アディアの腕に絡めるように抱きついて、幸せそうな笑顔を貼り付ける。

「あら、何か付けてくださるの？」

「とても良い物件があるんですよ。ちょっと待っていてくださいね」

奥へと引っ込んでいったのを確認すると、アディアが慌てたように小声で話しかけてくる。

「（ちよっ、ちよっとうとうしたんだよ？）」

「（ここで恋人の振りをしておけば何か良い事あるかもしれないじゃない）」

「（マジで言ってる？）」

「（言ってる）」

タイミングを読んだかのように颯爽と帰ってきた受付嬢の手には一枚のB5サイズよりも少し小さい紙があった。

「お待ちせしました。街の中心部から少しそれてはいるんですが、メインストリートの近くなので生活には不自由ないかと」

どうやら見取り図ではなく、その拠点地までの道のりが描かれた地図だったようだ。

その近くには食材屋、鍛冶、武器・防具屋、アイテム屋など色々な店舗が構えられている。

確かに生活には不自由ないけど、ここまで良いと何か裏がありそうだ。

「なんでこんな良い所なんだ？」

「あ、それはですね……」

お化けがいるのか、老朽化が進んでるのか。

結局受付嬢は行ってみれば分かります、とだけ言っとそれ以上何も言わなかった。

お金はいらないと言われたから、貸家でもローンを組んで払うものでもないらしい。

「見た目は他の家と変わらないみたいだけど」

「扉を開けると中にはびっしりとゴキ」

「よし逝ってこい」

「ちよ、まつ！ごめんまじごめん冗談だから止めて！」

「十時間ぐらいお風呂に入った後なら抱きしめてあげるから」

「何それ複雑！」

『びっしりとは居ませんが、巨大なのが居』

最後の馬鹿力を振り絞り、扉を一気に開けてアディアの背中を魔術で押し込んで閉める。

「そおおおい！！」

「ぎゃあああーっ！！」

せめてもの、バサンぐらいは焚いといてやるよ。

こうして私は拠点<sup>ホーム</sup>地に仲間という生贄を捧げた。

『で、結局は本当に普通の拠点地ホームだったと』  
 『冗談でもあんな事言わない方が身の為よ、フェルマー』

窓から姿を現し、問題ないと伝えてきたアディアに驚いて魔術を放ちそうになったのは言えなかった。

いざ入ってみれば新築なのかりフォームしたてなのか、中は綺麗に整頓され、シンプルにも家具が置いてあるぐらい。

バスとトイレは別、水道は通っているようだが、電気とガスはどうなってるのか分からなかった。

なんかそういう魔法道具でも使ってるんかね。

冷蔵庫みたいなものもあつたし。

二階建ての拠点地ホームを一通り見た後には既に夕焼け空が見えていた為、仕事は明日から。

そのため、近くにあった酒場で夕飯を取る事にした。

……というか、アレだ。

「どうして獣耳少女が私の元に来ない」

「知るか！」

「あ、あ、あんな耳とか尻尾とかふっさふさで抱き心地良さそうじゃない！」

「お前さ、会った時よりキャラ崩れてないか？」

「確かに」

「認めんのかい！……つかいきなりだな」

「初めての依頼で獣耳少女に会えますように」

「聞けよ」

その時、遠くの方で瓶が割れる音、床に何かが叩きつけられるような鈍い音がした。

一体何事かと、野次馬達が立ち上がってそっちに目を向け始める。アディアも気になって立ち上がって見ていた。どうせ野郎共の下らない喧嘩だろう。

「デメエ……！ふざけた事抜かしてんじゃねえぞ……！」

「誰がふざけてるって！？アンタがやった事はあいつの威信が掛かってんだよ……！」

「ああ！？おい、この女やっちまえ……！」

つて女かよ。

随分と勝ち気な人ですこと。

……ここ皇帝のお膝元だよな。

ちよつとメイנסトリートから外れてるとはいえ、首都だしこういうのは酒場を経営する人にとって迷惑なんでない？

と思ったらオーナーらしき人はノリノリで女性を応援してた。

え？あ……実は嫌な客で、排除するのにつってつけだったくとかも。

だったらあの人はどこかのギルド所属の方で、依頼として受けたからその嫌な客を挑発したとかかな。

こつという妄想とか好きだわー。

「おいレイ、あいつやばいぞ」

「そんなに心配なら助けに行けばいいじゃない」

「うえ？お、俺が？」

「何かダメな理由でもあるの？」

それから立ち上がったきり、あーだのうーだの唸り出したアディアに、何かあったと推測。

大方、街中で暴れたら半壊させたか、怪我人を出しちゃって止めに入るのも苦手になったとか。  
もしそうなら、あの時私でもやっつける事ができたころつきに絡まれてたつていうのもあり得そう。

そんな妄想もとい推測語りをやっている、女性が段々押される状況になっていた。

人影の隙間から見えた獣耳が　　って、ん？あ、アレは……！？

「どうした？」

「一分で決着させるわ」

「は？……えっと、いつてらっしゃい？」

「いつてくる」

呆然と見ているだけだったアディアを席に付かせ、一人群集の中に割り込んでいく。

微妙に魔力を使って掻き分け着いた先では、開けた空間で女性は果敢にも男五人と暴れていた。

『やっぱりあの獣耳だわ……！』

『動機が不純すぎやしませんか』

『気にしたら負けよ』

ノースリーブの襟が付いた白色の上着は足元まで裾があり、ひらひらと舞わせながら身軽そうに動いていく。

頭頂部では耳がびくびくと動き、それが事前に相手の動きを察知しているようだった。

一人の男がこちらに気付くと、目標をあ的女性から切り替えて向かってきた。

あっちじゃ敵わないから、仲間と見たこのひ弱そうな女をやっちま

おうって考えかな。  
あは、安直！。

「うらあああ！　　があっ！？」

下から急速に現れた闇の腕（魔力を込めれば結構怪力になる魔術）  
がアッパーするように男の顎にクリーンヒットした。  
結構な一撃を喰らった男は白目を向いて背中から倒れ込む。  
はい一人撃破。

「なんだ？テメエもあの仲間か？」

「げへへへ……結構イイ女じゃねえか」

「アンタ！危ないから下がってな！！」

「余所見してんじゃねえ、よっ！！」

「ちっ」

二手に別れた辺りで、女性がこちらの存在に気付いた。

こちらを見向きする程余裕はありそうだが、まあこのまま暴れられ  
ちやゆつくりご飯も食べられないんだし。

注文したすぐ後にこんな事になるんだから、迷惑だっつの。

「準備は良い　　げふっ！」

「おいお前な　　あぶっ！」

さっきと同じ手法でっていうのは少し物足りない為、足を引っ掛け  
て背中から倒れるように仕向ける。

二人とも背中を打って痛みに悶えてる間、最近よく使う機会の多い  
拘束魔術で糞虫のようになってもらった。

続けて魔力でエアガンを創造し、少し威力を強めて、女性に向か  
っていく男に放つ。

良い具合に当たって倒れ込んだ男を見た、もう一人の男がそこで初めて自分だけだという事に気付いた。

露出されていた肩を狙ったが、血は出てない筈だ。

エアーガンを男に向けながら近付き、確認すれば青くなってたから問題ないだろう。

「出ていきなさい」

「う、うううごめんなさい！！い、今すぐ出ていきます！！」

仲間を見捨てるような事はせず、肩を負傷した男を支えるように出口へと向かっていく。

糞虫状態の男達も解放し、気絶した男を連れて五人は酒場から出て行った。

乱闘が終われば、呆気なく席に戻っていく野次馬達をオーナーは引きとめ、片付けさせる。

常連だからこそ出来る事なんだろうけど。

創造させたエアーガンを霧散させ、片付ける事なく席へと戻れば、アディアが目を輝かせていた。

「やっぱレイはすごいな！」

「そりゃどうも」

「アンタ、レイって言うのか？」

「ええ。あなたは？」

「私はミリア。ミリア・ローマコンさ」

いつの間にか近くにいたミリアは、そのまま流れるように同じ席に着いた。

『ついにキターー！！この際成人女性でも良い！獣耳キターー』

『！』

『珍しくテンション高いですね……』

フェルマーも珍しくドン引きしていた。

これでポーカーフェイスだというのだから驚きである。

「さつきはどうしてあんな事になったんだ？」

「実はアイツら、知り合いのギルドの奴だったんだけど」

「ああ、それで。なにかやらかしたのね？」

「私じゃない！……いきなり怒鳴ってごめん」

「構わないわよ」

護送の依頼をやってたんだけど、依頼人が寝ている間にこっそりと運搬品を盗んだんだと。

それが金品だったのが依頼人にバレて自棄酒して愚痴程度に零してたら、リーダーと知り合いのミアリアはたまたま酒場において、つい聞かえてしまった言葉に反応して血が昇ってあんな乱闘になった、と。

まああれだよな、馬鹿だよな。

ミアリアはミアリアで沸点が低い。

美人さんなのに惜しいわー。

「ミアリアはどこかのギルドに所属してないのか？」

「してない」

「じゃあウチに来ないか？お前強そうだし」

「えっ？」

『あ、なんかフラグ立った』

『天然タラシと勘違い、ですか』

『異種交配っていけないのかな』

『いけるのではないでしょうか』

アディアの交渉により、結果ミアは我ら”銀瑠璃の遊星”ラスリ・ステラに加入しました。

ひゃっほーいもふもふだー。

「ミアは接近戦が得意なのか？」

「ああ。大剣を使う」

「すごいな、俺は細剣だから尊敬するよ」

うふふあはは、と良い雰囲気の二人を見てたら、私の腹から甘い砂が逆戻りしてきそうだ。

『なんてことなの……私はぼっちになる運命らしいわ』

『御主人、私がいままでもお傍におります故、お気を確かに！』

なんか虚しくなってきたわ。

そろそろ日付跨ぐんだけど、風呂入りたい寝たい。

え？フラグ？押し折るよ？

だって空気読むとか、面倒だしそれで精神すり減らせるのは無駄だし。

「ほらお二人さん、帰るわよー」

## 07 (後書き)

一部修正しました。

あいつはいつでも現状を楽しんでいた。

幼い時から冷静さを兼ね備え、そして自分が最大限楽しめるルートを最短で見つける。

何かを経験していたかのように、あいつは同年代の自分達が見ても大人のように子供のような人間だった。

「今回は”はちきゅーさん”に追われてるのかしら？」

「！ って、玲か……。なんだよ”はちきゅーさん” って。あと、誤解だからな。向こうが勝手に近寄ってきただけだし」

当時高校一年生、花の高校生、青春真っ只中。

裏道に入って迷わせようと、曲がり道の多い場所に入った時にはあいつはもう民家の壁に腰掛けていた。

坂道でもあり、下ろうとしていた時で、あいつは見晴らしのいい場所で見物を決め込もうとしていたんだろう。

意地汚い。

少しは幼馴染を助けてくれたっていいだろう。

「まあまあ。一哉君、お茶でもしてく？」

「……そうだな、そうする」

背丈以上あった塀を乗り越え、住んでいるであろう誰かさんに心の中でお邪魔しまーすと声を掛けておく。

意外にも庭から見た塀は高く、静かにしていればやり過ぎそうだった。

縁側に腰掛け、玲から渡された暖かい緑茶を一口飲めば心が落ち着

く。

「おい、あのハーフどこ行きやがった」

「それがこの裏道に入ったのは見えたんですが……」

「馬鹿野郎が！なに見逃してやがる！！」

「すつ、すいやせん！！」

「こここの出口全部塞げ！蜂の巣にしてやる」

誰の家だか知らないが、ここで一泊するのは気が引けるといふものだ。

やっぱ蹴散らしてくしかないのだろうか。

緑茶を飲み干し、うんうん唸るように悩んでいた俺に、玲はまたしても救いの手を差し伸べてくれた。

「この家は私の祖父の家でね、玄関は表通りに面しているのよ」

しかしこの幼馴染、無償で俺を助けた事など無い。

何かしらの条件が付いてくるが、それを提示してきた事も無い。

つまり、玄関から出た後に何かがあると。

玲の目が怪しく目を細め、口元が歪む。

「あなたなら簡単でしょう？だって羨ましいくらい出来る人だもの」

いつか言っていた台詞を思い出す。

今は目の前で文字の勉強をしているようで、一日で一気に単語から長ったらしい文章まで進んでいた。

つくづくこいつは俺よりも頭が良いんじゃないかと思うが、それは断じて俺自身が許さない。

完璧だと、天才だと謳われている俺はこいつに絶対負けてはいけな

い。  
こいつの目標が俺だと分かっているからだ。  
主人公が俺ならば、こいつは影の主人公だ。  
決して主人公とは行動しない、陰で支える影の主人公。

魔力の測定時、レニアは俺より魔力は低い炎属性を持っていると言った。

だが俺が手にした聖剣ダイヤモンドは、玲が幻術を使って誤魔化していると伝えてきた。

オールラウンドに何でもこなせる俺とは違い、膨大な魔力を持ち、且つ既に使いこなせていると言ってきた。

初めて負けたかもしれない。  
質も量も桁違いだと。

そして玲は、やはり俺と正反対の闇属性だった。

「そついえば一哉君、お勉強は平気なのかしら？」

「少しぐらいサボったって良いだろ」

「あらあら、無遅刻無欠席な優等生さんがそんなこと言ってる良いの？」

「はっ。あいつらもどうせ俺の外見しか見えてねえ。甘い言葉でも一言言っただけであいつらは馬鹿みたいに騒ぐ」

外見だけ見てきゃーきゃー騒ぐ甲高い声が大嫌いだった。

優しく微笑みかければすぐに騙される馬鹿を相手にするのが面倒だった。

そんな俺を分かってて、玲は何も言わずこの図書室に匿ってくれていた。

ダイヤモンドに言われて分かった事は、図書室全体に幻術を掛けている事。

きつとこいつは、俺がどう理由でこちらに来るかを分かっている。

たのだらう。

唯一、友人の中で気を許せる存在でもあった。

「ふうん……所でさ、聖女様に元の世界に帰れるかどうか聞いた？」

「あ？アレが易々帰してくれると思うか？」

「まさか。で？」

「膨大な魔力を消費するから、二つの月が満ちたりて重なる時に帰せるだよ」

この世界は月が二つある。

一つは小さく、地球の時のように一ヶ月掛けて満ち欠けを繰り返し、毎晩のように見られる普通の月。

もう一つの月は大きい為、三年を掛けて惑星の周りを一周する。

満月と満月が重なる時、たった数時間だけこの惑星は魔力に満ち溢れるのだが……。

元より呼び寄せるだけで帰すつもりなど毛頭ないだらう。

それにあの女なら、あわよくば俺と結婚する事も考えているはずだ。純真な乙女も、結局は女だ。

「私達がこの世界で最初に見た部屋、覚えてる？」

「ああ」

「一昨日行ったら、床には術式が浮かび上がっていたわ。昨日行ったらもうなくなっていたけど」

「さすがに消え」

「違うわ」

術式は発動されるアクションまで補助するだけのものだ。

つまり発動されたらすぐに消える。

俺自身も魔術の訓練はしているから過程は分かる。

酷く魔力の消費する術だったら、しばらくは残るらしいが。

眉間に皺が寄るのを感じながら、俺はペンを走らせるのを止めた玲を見た。

「術式を解析したら、あれはあちらとこちらの世界を繋ぐ道になっていたわ」

「じゃあ俺達は帰ろうと思えば帰る事が出来るのか……？」

「帰れたわよーそりゃ。でも誰かが意図的に消しちゃったから、私達は自力で帰るしかないの」

指を組んで、顎を乗せながらいつものように目を細め、口元を歪ませて笑った。

その笑い方は酷くイラついていて、この現状を楽しもうとして、そしてその”誰か”を突き止めていてどうしてやるうかと考えている。あの時もそうだった。

彼女は俺に、あのチンピラどもをどうにかしろと目で語っていた。全員を縛り上げた後、タイミング良く来た警察はきつと彼女が呼んだものだろう。

そのあと別件で追っていた犯人と一致し、警察署から書状を貰い、また有名になる。

彼女はそれでイライラを解消したというのだろうか？

それは本人しか知らないし知る気もないが。

「残念だけど、私だけでは魔力不足でね……何か魔力を補うものを探し出してきてくれたら帰れるわよ」

そう言っただけで彼女は深紅の色をした本のあるページを開いてこちらに見せながらそう言った。

描かれていたのは術式陣で、細部に亘るまでみっちり記載されている。

これがその帰れる唯一の手段なのだろうか。  
それでもすぐに帰れる訳ではない。

浦島太郎のような事になるかもしれない。  
最悪その術式すら発動できないまま、俺達はこの世界に閉じ込められるかもしれない。

「あなたなら簡単でしょう？だって羨ましいくらい出来る人だもの」  
だというのに彼女はこの現状を楽しみ、大いに前向きで、そして物  
凄く他人事だった。

幕間 02 (後書き)

補完のようで補完になってないっていつ……。

まずは手ごころな依頼を個々で受けていこうという話になり、まあさくつと三つ纏めて終わらせてきた。

支部の中の依頼受付窓口（なんか市役所みたい）でさくつと完了の手続きを終わらせても二人はまだ戻ってこなさそうだった。

受付の人にオススメの場所はどこかないかと聞けば、帝立図書館と言ってきた。

まさか言葉に被せて答えてくるとは思わなかったけど。

なんでも様々な文化が合わさった帝国だから色々な蔵書が収められていて世界一を誇る図書館なんだと。

それはそれは良いヒントが落ちてそうで。

ついでに二人が依頼から戻ってきた時の為に、伝言の手紙を渡してほしいと頼んでおいたから問題ない。

外観はパルテノン神殿のような建物でも立派。

扉も日本人な私からしてみればとても大きく身長以上の物だが、この世界では寧ろ普通と言って良い。

大きな扉を抜けて中に入っていけば、まず目に入るのは背の高い本棚。

二階建てのようだが、天井の高さを強調する為に二階部分は壁に沿うように、中心部を開けて設計されていた。

その一階中心部、私の目の前には真ん中が抜けた円卓があり、本の貸し出しをここでやっているようだ。

ざっと見回しても圧倒的な景観には驚きを隠せない。

魔術関連の本を大体抜いて、近くの椅子に腰を掛けた。

「レイ様とミリア様から伝言のお手紙が」

「あの二人もう終わらせたのか？」

「ええ。レイ様は確か昼過ぎに、ミリア様がそれから少し後でしょうか」

「あー……」

なんとも気の抜けた声が自分から出た。

受付嬢から二通の手紙を受け取る。

本当に伝言のためだけに、二つとも簡単に折りたたまれているだけだった。

すぐに受付から離れて中身を読む。

「レイは図書館だった？ミリアは拠点地ホーム、と……」

なんだって図書館にいるんだろうか。

とりあえず、ミリアは既に今日の夕飯分を買っておくという事も書いてあるので助かる。

酒場で食べてたら勿体無いし、どうせキッチンがあるのなら、と朝そう決めたからである。

作るの俺らしいけど。

「そついや最近じゃ夜になると盗賊が出るんだって？」

「ああ、オレもやられたよ。いつの間にか財布をスられてるんだからな」

盗賊……？

既に辺りは薄暗い。

レイは一応俺を助けてくれた少女だけど、まだまだいたいけな少女でもある。

ミリアは既に拠点地ホームにいるから、とりあえずレイを迎えに行くべき

だろう。

今度は柄の悪い奴に捕まらないよう、気をつけながら図書館のある方へ急いで向かった。

すれ違いになるかもしれないから余計だった。

本を読みながらフェルマーの書の空白ページに彼と共に、ああでもないこうでもないと言いながら術式を書いていく。

基本的に時間の概念を忘れるほどの集中力を持ち合わせていない為、自然と書の隅には術式とは違う落書きも混じっていく。

ついでに言うところと魔導書だけでなく、この世界で大人気の英雄伝を読んだり、料理本に手を付けたり。

完全に日が暮れた頃には殆ど人がいなかった。

お迎えが来ない辺り、どうも伝言のアレは無意味だったようだ。

まあ夕飯を食べるのに会話する機会はあるだろうからその時で良いか。

全ての本を片付けるのはさすがに無理があつたので受付の人に任せるとする。

蒼い制服に身を包む金髪の美人なお姉さんは眼福モノだと思えます。そんな人に任せるなら自力でやった方が、と思っていたら。

「便利な魔法具があるので大丈夫ですよ」

おお……さすが首都。

首都で何かがあるかなんて分からないけどとりあえず凄い魔法具があるからお姉さんの手は煩わせないで済むらしい。

「こちらに通う予定でしたら図書カードを作りますか？」

「じゃあお願いします」

「はい、ではこの魔珠に触れてください」

出た、魔力測定時にそんな名前を聞いたぞ。  
と思っただらこれは魔力の波長で個人を特定して管理しているらしい。  
この波長というのは一人一人違うらしく、まあDNAと一緒に少し  
似ていても僅かに違う場所があつて、それで判断できると。  
まあ一々波長なんて調べてたら利用者の負担は大きいらしく、この  
時だけ触れさせて特殊なカードを作るんだと。

「レイ様のご登録、完了致しました！ではまたのご利用をお待ちし  
ております」

手渡されたのは元の世界でも使っていたキャッシュカードと同じぐ  
らいのサイズ。

半透明でありながらしつかりとした材質で、とても魔珠の中から出  
てきたとは思えない。

本当、あれどういう仕組みなんだ？

早速フェルマーの書の適当なページに挟み、フェルマーの部屋（と  
いう名の異次元空間）に保管してもらう。

「レイ！……ああ良かった、無事？」

いきなりの事でいまいち状況が理解できないが、とりあえずアディ  
アが迎えに来たという事は分かった。

なんで肩とか腕とか触って怪我していないかの確認を取るのかまで  
は分からなかったけど。

「どつしたの？」

「最近盗賊が出るって聞いて迎えに来た」

盗賊って変質者の類？

ああでもそういつのってどこにでもいるんだね。

「それはどうも」

「うん、本当間に合ってよかった」

なんといつかさ、アディアってへたれキャラだと思ってたわけよ。

ごろつきの件で思い切り先入観抱いてて悪いんだけど。

こう、ね。

だらしないって言ったたら失礼だけど、にへらって笑う顔が更にへたれ感アップっていうか。

腹を出したデザインの服を着ているおかげで立派な腹筋を拝められているからか、中性的な顔とはいえ女だと思わないけど。

かと言って男にも見えないんだけどね、さすが中性。

肌寒い空気に鳥肌が出てきた。

「その服で寒くないの？」

「そうか？まあ竜人族は基本的に体温が高いから」

え、じゃあエルフの耳はどうなんの？

## 01 (前書き)

いつの間にかユニーク2、000 PV12、000突破してました。

凄いのかよく分かりませんが、これだけ読んでくれる方がいてくれるとこの小説もそこそこ面し「

調子に乗る投稿者ですが、色々な方にありがとうございます!!

「レイ・カゲミヤ、あなたを国家反逆罪で捕らえます」

都会のような人混みがある首都クリスタル・パレスのメインストリートは今、私がこの世界で最も嫌う人間代表によって騒ぎになっていた。

って言ったら凄い他人事よね、私。

周囲を取り逃がさないように衛兵達で囲い、何も感じさせない目でこちらを見てくる聖女様と対峙していた。

まさか街中でこんな事言われるなんて思いませんでしたけど。

「おいレイ、お前何やったんだ？」

「さあ？なんの罪でしょうね？全く記憶がございませんよ」

声高に民衆の前で宣言した聖女様は、返事の言葉が気に喰わなかったらしく眉をしかめている。

別に良いわよー？捕まっても逃げる自信はあるから。

でもアディアとミリアを巻き込むのはいけ好かないわね。

「あなたは勇者としての義務を放棄している、それだけで十分な命令違反となります。どうしてもすぐにも我々と合流しようと思わなかったのですか？」

あああれだね、これはやられた。

一哉君しか言葉が分からなかった時、こいつの親父と面会した時に何か言われていたのか。

しくったな、私にも寄越せぐらい言っておくべきだったか。

まあでも、突き飛ばしたのあなたですからね。

もう二度と近寄らないで下さいまし！つて事だろ？

「お言葉ですが、私は命令を聞いた覚えが無いのですが」

「私の父と謁見した時にあなたもいたでしょう？その時命令が下されたはずですよ」

「いましたっけ？」

「いましたわ！！」

それに今私が出来る事はこの場で自分の情報を漏らさない事だ。

こんな所で弁解とかしたくないんだけど。

然るべきところで話してあげるから、早く連れて行きなさいっての。

「くっく！もういいですわ！！この女を早く連れていきなさい！！」

「はっ！この二人も共に連れて行きましようか？」

「連れて行きなさい」

はあ？と呆れた溜め息が出てくるのをなんとか堪え、衛兵のされることがままにされておく。

不機嫌そうだった聖女様の顔がいきなりご機嫌顔になる。

「その方達に、この女の正体を教えて差し上げましょう」

あ、こいつ反省してないなって思った瞬間だった。

正直言つて首都に来て一ヶ月が経ち、ようやく一哉君と会える手綱がぶら下がってきたなと思っていた。

私が上陸したベルルカには一哉君達の姿が無かったから、違う港町に到着したとしてもこの皇帝のお膝元にいればいつかは世界を巡る上でここに来るんじゃないかとは思っていた。

世界最大と謳われるニヴァーナ大陸のどこかには一哉君達がいるって事だし。

ああこの期間で時空間系の術式を煮詰められたのは良かった事かな。

「レイは本当に勇者なのか？」

「……あなたはその話、どこまで知ってるかしら？」

「んー？魔王を倒す力を持つ人間、って所かな」

「ミリアは？」

「興味ない」

「そう」

やけにばっさりと切るような返答なのがミリアらしいとも思う。

現在護送車にてクリスタル・パレスからどこかへと運ばれている途中。

がたがたと揺れる護送車の壁に凭れかかりながら、僅かな光が入る天井付近の窓を見る。

捕まる前に昼ごはんを食べてきたから空腹感はないけど、揺れる護送車のおかげで吐きそうだ。

「私はレイが好きだ」

いきなりの告白！？あれ、いつフラグ立てましたっけ。

私はバイでもレズでもないぞ、そうノーマル。

可愛いと美人は正義だ、とありきたりな台詞は言わせていただくけど。

「たとえレイが何者でも、私は傍を離れるつもりはないから」

頬を撫でるようにして手を添えたミリアの表情は心配そうなものだった。

もしかして、さっきの正体が……って聞いた辺りで私が彼女達から離れると思ったのかな。

気持ち悪くて顔真っ青だから余計勘違いさせたか？

とりあえずミリアの頭を撫でておいた。

「ありがとう」

ぷい、と顔を背けられた。

なんだ？お礼言われ慣れてないのか？うい奴よのお。

使い道違うか。

「俺も離れる気はないよ。離れようとするなら追いかけてやる」

「……それはどうも」

へたれから男前にレベルアップした！ってレベルアップ早い！

なんだか身の危険も感じるような台詞ではあるが、二人からの愛の告白は素直に受け取っておくとしよう。

好意を受け取っていても嫌ではないしね。

行き過ぎた好意は勘弁したいところですが。

『命の危機とあらば、私はあなた様のために身を粉にしてお護りします』

『その時が来ないよう祈ってるけど、そうなったら死なない(？)程度によろしくね』

ついには三人目からの愛の告白まで受け取ってしまった。

いや、フェルマーは最初から全身全霊で愛の告白をしていたな。

……あれ？していたっけ。

仲間になってからそんな経ってないっていうのに、なんだってこん

な慕ってくれてるんだろ。

人徳のおかげ？まあ私も君ら好きだよ。

とりあえずうえっぷ、吐きそつだ。

どうにかならないのかこの護送車。

01 (後書き)

罪人を運ぶのに護送車であつてたかな… (汗)

## 02 (前書き)

お久しぶりです、生きてます。

更新したのが随分前に感じますね、皆さんは元気に過ごされている  
でしょうか。

い 作者は文章書かずにウハウハしながらゲームしてましたごめんなさ

吐き気と気持ち悪いのと頭痛と格闘し始めて四日。

ようやく辿り付いたのか、扉が開けられると眩いほどに光が差し込んで何も見えなくなった。

座りっぱなしで足元も覚束ない中、出ると無慈悲にも一言の命令に従いながら降りた時だった。

「玲!!!」

「ぐはっ!!」

横から掠め取るように、速すぎて何が激突してきたのか分からなかった。

まあ声からして一哉君だろう。

力を込めて抱きしめてくる辺り、やはりこいつは相変わらずの性格である。

「ぐ、苦じっ」

「あ、ごめん!……っと、無事そうだね」

「全然無事じゃない、吐きそ……うっ」

「大丈夫? 命の躍動、彼の者に与えよ ヒール」

術の発動と共に、身体に光の粒子が溶け込み、一瞬で乗り物酔いが消える。

ついでにいうとこれまでの疲れも取れた感覚さえする。

「ありがとう。……そっか、治療術習得したの」

「うん。光属性だから、丁度良かったんだ」

どうやら衣装チェンジしたらしく、あのヘンテコな勇者っぽい服ではなく白を基調とした軍服のようなものを着ていた。

アレは私も無いと思ってたから、今の服が凄くまともに見えた。

久しぶりの幼馴染との再会を楽しんでいると、横からかなり恨めがましい視線が突き刺さってくる。

なんだと思っていると聖女様と猫耳少女がこちらをじっと見ていた。

「気軽に触らないで下さい」

「そうだにゃ、あんたはカズヤにふさわしくないのにゃ」

聖女様は相変わらずとして、なんだかこの猫耳少女はそのまま体言しているようである。

どうやら一ヶ月の間でまたしてもハーレムパーティーを……もうこの際どうだって良いか。

「二人とも、いい加減にしてくれないか」

「か、カズヤ様……？」

「どうしたにゃ？あたし変な事言ったにゃ？」

「玲は俺の幼馴染だ。幼い頃からの友人に少しは敬意ぐらい払えよ」

珍しいと思った。

滅多に怒らない一哉君が感情むき出しで言葉が少し荒っぽくなった。

二人は一哉君に言われたのが相当ショックだったらしく固まってしまった。

っていうかさ、聖女様って言われるぐらいなんだから少しぐらい嫌いな人間に対しても笑顔で厭味の一つぐらい言えるようにしたい方が良いんじゃないの。

少なくとも一哉君は女嫌いも多少入ってるんだからそれを隠して上手くやってると思うよ。

「ねえ聞いた？私がここにいる理由」

「玲が見つかったって事しか聞いてない」

「あら？その彼女は私を”勇者の義務を放棄した国家反逆者”として、友人まで巻き込んでここまで護送してくれたけれど、あなたには話を通してないのね」

「はあ！？いつ放棄したんだ？大体、お前はレニアに突き落されてから行方不明扱いになってたってどういうのに？」

一哉君の冷たい目で見られている聖女様は、面白いほどにびくびくと震えながら目を合わせないようにしていた。

やっぱり言っただけだったか。

こちらからも冷たい目で見れば睨み返してくるのかと思ったら、しおらしく俯いた。

自業自得、ざまあみろだの心で罵詈雑言を吐いていると、ミリアが眉を吊り上げ睨みながら一哉君の襟元をいきなり掴んだ。

「おいっ！今の話、どういう事だ！！」

「どっとうって？この女は風の魔術を使ってまでリヴァイアサンの嵐の中、玲を海に突き落した」

気迫あるミリアの声に眉一つすら動かさず、彼は冷静にいなした。

その言葉を聞いた途端、ミリアは一哉君から離れて聖女様へと飛び掛ろうとした。

周囲にいた衛兵が反応しても、既にミリアの手の届く範囲に聖女様はいる。

「！」

か細い首にミリアの手が差し掛かろうとした時、ぴたりと突然動きを止められた彼女は、誰が止めたのか分かると悔しげな視線を寄せた。

「ミリア、その方はヘレーネ教団の聖女様よ」

「どうして止めるの、レイ！アンタを傷つけた人間だっていうのに……！」

「それでもよ」

聖女様は地面に座り込み、目からは涙がこぼれている。

正直言つてその姿を見ても許せる気がしない。

ミリアの気持ち、嬉しいけれど気持ちだけで押し留めて欲しかったかな。

「そっか、レイが嵐に巻き込まれたのはそういう事情があったんだな。で、リヴァイアサン倒したのってこの人への腹いせ？」

「心外ね。やるんだったら本人にきっちり返すわよ」

「リヴァイアサン倒してたんだ。一応でも勇者の仕事はしてた訳だ」

ああいうのが勇者の仕事なんだ……。

だったら勇者いらなくね？ああそっいえば魔王を倒せる力を持つ人間じゃないとダメなのか。

うーむ、だったらわざわざ異世界召喚に踏み込まなくてもこの世界から探すくらいは出来たんじゃないのかね。

むしろ世界にいなかったからわざわざ異世界にまで手を伸ばしたのか、伸びてしまったのか。

でも翻訳付きの指輪渡してたから前者だろ、どうせ。

「カズヤ！酷いのじゃ！そこまでレニアに酷く当たらなくても」

「こいつはそれだけの事をやった。少しは自己を省みる事だ」

付いて来て、と歩き出した一哉君の後を追う前に、ミリアの拘束を解く。

聖女様は既に衛兵と猫耳少女に守られていたから、危害は加えないと思うが……少し心配で振り返ると案外ぴったりと後ろに付いていた。

「ごめん。少し血が上ってた」

「いいよ、ミリアの性格は知ってるから」

短気で仲間が馬鹿にされたらすぐに喧嘩吹っ掛けるのなんて、最初から知ってる。

色々な道に枝分かれしている城内を完全に覚えて歩くには相当な時間が掛かるだろうと予想できる。

右へ行ったり左へ行ったり。

上の階へ行つたかと思えば下の階へ降りたり。

最初は一哉君が面白半分でわざと迷った振りをしているのかと思つたが、どうやら彼自身も迷っていたらしい。

おいおい誰だよ、あんな自信たっぷりについて来いだなんて言ったの。

「まずい、このままでは夕飯に間に合わない……!!」

「ちなみに夕飯は？」

「エビフライが食べたい」

「それ一哉君の希望じゃない」

「今日こそエビフライが出ると思つんだ」

お前は一体いつまでエビフライが出ることを望んでいるんだ。

結局四人仲良く、全く人が通らない古ぼけた通路を一哉君の言う夕飯の時刻以後も彷徨う事になった。

「遅いつ!!」

「ちよつと寄り道しちゃった」

「ちよつとどころじゃねえよバカっ！俺が一体どれだけこの時間を楽しみにしていた事か……！」

苛立ちを隠さずテーブルに拳を叩きつけたその人物を見た時、初めて会ったような感じがしなかった。

地団駄を踏む彼の事などお構いなしに一哉君は悠々と椅子へと座る。肘をつけて、未だに顔を上げない銀髪の彼を見下ろすように眺めた。

「なんだよ、俺とそんなに飯食いたかったのか？」

「当たり前だろ？お前がいねえと飯食えなくしたのはどこのどいつだよ！俺を飢え死にさせる気がこの野郎!!」

ビシツときれいに腕をまつすぐに伸ばして一哉君を指した。

散々文句を言い終わった後に流れた「ぐう」という音がなんだか場違いに聞こえないのが不思議である。

それは今まで食事が話題だったからだろうか。

恥ずかしさで一気に勢いを失くした彼はそのまま着席した。

それが合図だったかのように、彼の後ろにいた軍服の女性が私達にも着席を促した。

「あーなんか見苦しい所見せちまったな」

「存在自体見苦しいから心配いらないよ」

「フオローか？喧嘩売ってんのか？」

「後者だね」

「よし、今からお前に出す料理を全部パイラの肉にしてやる」

「この方はこの国で今一番国民に支持されている偉大な方で、そして次期皇王とも言われている方なんだ」

その素早い掌の返しようには感心する。

そしてそれを聞いた次期皇王とやらはかなり満足げである。

……そんな簡単な褒め言葉でこの国は大丈夫なのか？

ちなみにパイラの肉とは、パサパサで引き締まりすぎて硬くて食べづらいと言われている。

そして言わずものがな魔物の肉である。

唯一魔物の中で食せる肉として有名だが、あくまで非常食という考えではない。

「で、そのお偉いさんと私達は一体どういつ見で夕食を一緒にさせて頂いてるのでしょうか？」

「あれ、覚えてないの？」

『こちらの方はエレヴァン王国の皇子ですよ』

『あー……あの偉そうな感じの人？人違いじゃないの？』

先程までのやりとりを見ていると威厳に溢れていた第一印象とは全く違う印象を受ける所為でなのか、バカキャラに見えてくる。

「何だと？俺はお前の事を覚えているのにどうしてお前が俺を覚えていない!!」

「さあ？何分、どこかの誰かさんに嵐の中海に落とされたりと色々ありましてね」

「む……その件に関してはこちらに任せておけ」

「そうですね」

まあどうだって良いんだけど、たぶんごちゃごちゃと複雑な事情って奴がからまってくるんだろね。  
ってというか誰の仕業か分かってるんだ。

「まあしばらくは勇者としての仕事もないし、ゆっくりしていけよ」

「申し訳ございませんが、既に”銀瑠璃の遊星”ラズリ・ステラのレイ様はギルドより退会なされております」

「なんでだよ！？大体、退会手続きもしてないだろ！？」

身を乗り出して”王の玉魔”セントラル・ドグマ支部の受付で大声を出したアディアの首根っこを掴んで引き摺り下ろす。

正直叫びたいのはこちらの方だと言つのに。

「申し訳ございません、指名手配犯をギルドに所属させる事は規約違反となっておりますので」

「指名手配って……」

「あれは嘘じゃなかったか？」

「哉君の言い分が正しいのであれば嘘だろうけど、一旦指名手配として流されてしまえば後ろ指差される人生が待ってる。」

「それは無実でも駄目なのかしら」

「申し訳ございません、ギルドの威信に関わりますので」

淡々とした言葉と表情で告げられた事実。

先程止めたというのにまた受付の女の子に突っ掛かってはミリアに咎められるアディアの口を塞いで椅子から立ち上がった。

「いいの？」

「ええ、どうでもいいもの」

食い扶持が無いわけじゃないし。

それに、皇子があのお聖女の事は任せとけって言ったのだし、名誉毀損とか訴えても悪くないと思うのよ。

まあ本当は物理的にも精神的にも潰しておきたい所だけど異世界召喚が唯一出来る存在らしいし？

あーあ、本当苛つくなあ。

今すぐにも帰れば良いのに。

「玲！」

昨日から宿泊しているエレヴァンの首都でもあるサナイフェの城に戻ると、一哉君がこちらを発見するなり走ってきた。

「どこ行ってたの？」

「ギルドに行つて来たのよ。それで、何かあったの？」

「ああ、皇子が呼んでる」

「さっそく仕事？」

「たぶんね」

結構な距離があったというのにまったく汗をかいてないし息も上がってないのはさすが一哉君だとしか言えない。

地理覚えなくせに勘で道分かっちゃうのもなんだかムカつくけどな！

昨日は道案内の意味すらなくなってしまいいにはフェルマーに頼んだけど、今日は何故かすんなりと皇子の私室に着いた。

これ、ミリアとアディアが昨日わざと間違えたんじゃないかって思っていないと良いんだけど。

涼しい顔で軽いノックだけをして相手の返事も聞かずに一哉君は扉

を開けた。

「お、今日は早く来たな」

おいこら失礼だろ、と思ったが当の本人がそんなこと考えていないようだったので良いんだろう。

……本当、この国大丈夫なのかな。

「俺達呼んだのってなにか手がかりでも見つかったのか？」

「手がかりって？」

「魔王を倒す為の、だよ」

「ああ……。本当に倒すの？」

「なんだよ。俺が魔王を倒せないと思っているのか？」

そんな面倒事を私達に任せる人間なんて放置しておけばいいのに、とは思っている。

元の場所に帰すだなんて聞いてないもの。

だったら帰る方法を探した方が意義を感じてしまつのはひねくれて  
いるからだろうか。

「そうじゃない」

「じゃあなんだっていうんだよ？」

「って言われちゃうと私にも分からないもの」

「なんだそれ」

思えばこういうやり取りをするのは久しぶりかもしれない。  
懐かしいと思つたのか、無意識に笑みを零していた。

「話の腰を折ってしまいましたして申し訳ございません」

「構わん。久しぶりに会つたとは聞いているからな」

「ありがとうございます」

なんだ、意外にもこの皇子なかなか良い奴じゃないか。少し私の中での彼の印象が変わった……気がする。

「お前達を呼んだ理由だがな、各地で異常な力が発生していると聞いた」

「それは……」

「ああ。四宝の可能性が高い」

『四宝？』

『火水地風の四精霊の力を宿した宝具です。彼らの力の象徴なので、世界に影響を与えるのも無理がありません』

『その四宝が魔王を倒す手がかりになるっていうのね』

『……神さえ屠る事もできると、言われていますから』

解決の糸口が見えてきたじゃないですか。

それよりもフェルマーの様子が気になるな。

神さえ屠ると言った時、躊躇った感じがしたのだけど、もしかしてディレンタはその四宝で何かされたのかしら？

「具体的な場所は分かっているのか？」

「一つは把握したところだ。他は我が国が誇る術師達に場所の特定を急がせている」

「っていう事は、随分と長旅になりそうだな。なんせ端から端だろ？」

「ああ。なに、最速の足を用意してあるから問題ないだろう」

それはどんなものか気になるところだ。

このエレヴァンは魔術で栄えた国のようだから、それを用いた技術

とかかな。

「あと”銀瑠璃の遊星”ラスリ・ステラに個人的な依頼をしたい。明日”王の玉魔”セントラル・ドグマへ向かってくれ」

「え？お、俺達もレイと一緒にいくつもりだったんですが……」

「報酬はたんまりと用意させてもらう。それでも嫌か？」

「金で釣られると思ってるのか？」

「レイがメンバーじゃなくなっても、それでも俺達の仲間なんです。俺達に依頼を出すってんなら彼女も連れて行きます」

……なんつだこの青春漫画みたいなノリ。

恥ずかしいというかなんというか……複雑な感じでもよってしま  
うのはなんでだろうか。

嬉しいのか？まあここまで自分を慕ってくれると確かに嬉しいけど。

面と向かって言われた皇子は一瞬だけきよとんとさせて、そして大  
笑いしました。

「あつは、あははは！お前ら面白いな！真面目かつ！」

「お、おも……面白いつてなんだよ！」

笑われたと分かったアディアは思わず叫んでいた。

一通り笑って落ち着いたのか、クレイは一息吐かせるべくそばにあ  
ったティーカップに口をつけると鋭い眼光でアディアを見つめた。

「行ってみれば分かる」

どうせお前らも一緒に行つて四宝集めるの手伝ってやれ、とかそん  
なんですよ。



前回言ったような気がするので割愛させてもらおう。

”銀瑠璃の遊星”<sup>ラズリ・ステラ</sup>への依頼は”四宝集めの手伝い”であり、受けて初めて皇子の意図に気付いたアディア君がバカに見えた。

ミアアはさすがに分かってたらしいけど、なんだってアディア君はバカ（アホ？）の子なんだろう。

そういえば最初に会った時もチンピラに絡まれてたし。

彼女が天然ボケならアディアはドジツ子なのか？

ミアアならまだしもアディア萌えは無い、かなあ。

「なんだか久しぶりだよな。こうやって玲と話すの」

「そう？一哉君がいない日々も楽しいと思ってるけど」

「玲はかわいくないなあ」

お前の言うかわいいの基準なんて知ったこっちゃねーよ。

舗装されていない街道ではあるが、揺れを全く感じない事で快適さが伴う、この最高級の馬車のおかげで全く酔わない。

というのも馬車全体が特殊な術式を用いて浮いている為である。

馬達の負担と馬車酔いを考慮したエレヴァンでは最新の技術だ、とは皇子がやたら嬉しそうに話していた。

「ところであの双子はいないけど、どうしたの？」

「双子？……ああ、サナイフェに着いたらいつの間にかいなくなってた」

あんなに慕っていたのに、こんなすぐポーンと忘れられるなんて…

…なんて哀れなの。  
というか着いたらどっか行っただっていうのも気になるけど。

「目的地までのルートの確認でもしておく？」

「ああそっか…：オリデユス山脈からは歩くんだったわよね」

オリデユス山脈とはニヴァーナ大陸の北に位置する極寒の地との境目であり、寒さを遮ってくれている南側の住人にとってはありがたい山脈なのである。

よって、オリデユスという名はかつての北の英雄王に由来すると言われている。

比較的北に位置するエレヴァン皇国の首都サナイフェもこの山脈に寒さを守ってもらっていると言えるだろう。

そんな山脈を越えた先に私達の探す手がかりとやらがあるらしい。なんでまたそんな寒い所から行くかな。

「山越えをする人なんて滅多にいないらしいから、往復含めて三週間には掛かると考えないと」

「食料と防寒具、それに雪山での体力消耗を考えると荷物はコンパクトにしましょう」

「それに魔物は強いって聞く。アディアとミアの武器は何本か支給されているとはいえ、限度がある」

「刃こぼれしたらそれだけ仕留め損ねて体力を失くすわね」

旅慣れていないド素人がいきなり雪山に登山していくのは無謀だとも一目瞭然である。

まったく、いきなりとんでもないものから探させるものだな、あの皇子は。

どう考えたって荷物もちの口バも連れて行けない状況で荷物が多すぎ。

「でも玲は何か活用できる方法を知っているんだろう?」

そんなことは露知らず、目の前の男は飄々と言つてのけた。こいつはきつと私の事をドラ もんだと勘違いしている。

で、四次元ポケットがフェルマー。

そこそこ妥当な線だと思つから否定はしない。

『あなたの本にどれだけの物を詰め込める?』

『やはりそう来ましたか。一ヶ月分入れるなど、朝飯前ですよ』

『じゃあそこにプラス素材が来ても余裕ね』

『え?あ、いやちよつ』

「荷物面は問題しなくても平気よ。それよりも」

「さむ……ッ!」

交代してから馬車の中にいたため、寒さに気付かなかつた。

すぐに分厚いマントを羽織つたものの、身を凍えるような寒さに震えが止まらない。

皇子が言っていた異常な力というのが、山脈の向こうにある寒さが麓の村までやってきているのだ。

今まで凌いできた山脈を越えるほどのこの寒さで、村人達の姿は全くと言つていいほど見えない。

ミリアもこの気温の所為でいつもよりテンションが更に低い。

「大丈夫か?もう一つ羽織れるものあるけど?」

「その格好を見てると寒さが余計増すわ……。でも、ありがたいくたたく」

いつもの腹だしの格好でいるアディアはけるつとした顔で分厚いマントを手にしながら近付いてきた。

「ご丁寧にも貸してくれるだけでなく羽織らせてくれたので、手を伸ばして余計に寒い思いをしなくて済んだ。」

「山はこれ以上厳しいっていうんだから、何か対策用の術でも開発しておけばよかった。」

「それにしても。」

「一哉君、相変わらず過ぎでしょ……」

「そうかな？ディアマンテが空気を調整してくれてるんだ。寒さなんて感じないよ。」

「くっ……卑怯だぞ！仲間だというなら全員分に掛けたらどうだい？」

「ディアマンテが勝手にやってるんだから卑怯じゃないと思うけど」「ミリア、口で一哉君に勝とうだなんて思わない方が賢明よ。」

「じゃあどうするんだとでも言いたげな表情に、どうやら彼女はまだディアマンテの恩恵に与る事を諦めていないらしい。」

「雪山で倒れたらどうする。」

「大丈夫よ。一哉君なら私達三人が雪山で倒れても一人で担いで麓まで降りてこれるわよ。」

さて、フェルマーの書の中に軽い呪いを施す術式を軽くメモしていた気がするんだけど、どのページにあったのかしら。

『三百九十五ページの右下にあります』

さすがフェルマー。

検索仕様はいつ付けたのかしら？

「玲？何そのページ……もしかしてお前、俺の事脅すつもりか？」

「一哉君じゃなくてそのディアマンテって奴。さああなたの大好きな一哉君が呪いで不憫な目に会う前にさっさと私達に恩恵を与えなさい！」

「結局俺も脅されてるじゃないか」

しんしんと降り積もる雪のおかげで村の入り口で騒いでも誰も咎めてこない。

宿屋備え付けの馬車小屋に馬達を置いて部屋を取りに行っていたアディアは、一哉と彼に襲い掛かる二人の友人の楽しそうな姿に無意識ながら羨望の眼差しを送っていた。

「あいつら何やってんだ……？」

なんだか自分だけ除け者扱いされてる事が悲しくて、それを誤魔化すように手を振って雪にも負けないぐらい、三人に向けて大声で叫んだ。

一しきり雪の中で動いたおかげで体も温まり、良い感じにお腹も減った。

アディアがすごく寂しそうだったが、結局あの後四人で雪合戦していた。

先程までの寒さがどこへやらと感じだが、久々に心から楽しんで体を動かした気がする。

「あんたらこの寒い中駆け回ってたのかい？」

宿屋の玄関口で被った雪を払う姿を見ていたのか、熱いお茶を一人に配りながら女将さんが話しかけてきた。

「そうなんですよ」

「元気だねえ」

「そういえば、まだこの地域は積雪の季節じゃなかったんじゃないか？」

「そうだよ。だっていうのに、今年はもうこんな雪が降っちゃまってねえ……おかげでまともに食料を保存できてないよ」

愚痴りながら離れていった女将さんの背中には疲労だとかそういうものが感じられた。

「あの人も大変なんだな。……でもさ、それを俺らがなんとかするんだ。頑張ろうぜ！」

見送っていたアディアが一層意気込む。  
だが私達も彼女達と同じ食糧難なのだ。

「現実見てから言うってちょうだいね？」

「食料はエレヴァンから出てくる時に何日分か持ってきてるけど、きつと山越えしてる間に底を付いちやうね」

「マジで？この前”物質永久保存できる”って言ってたじゃんか！」

「誰が？」

「レイが！」

アディア君、指を差すのはいかんよ。  
一斉にこちらを振り向いた二人の視線もなんのその。

「それは理論上の話であつて、まだ出来てないわよ？」

「じゃ、じゃあ……一気に移動できるっていうのも……」

「そうね。まだ出来てないわ」

「その理論、俺にも見せてくれない？」

おっとまずい。

こうなつては全て一哉君に実用化可能の所まで一気に持っていかれてしまう。

せつかく私一人（＋フェルマー）で考えた理論を、こいつはたった一回で理解して術式を組んでしまふのだろうか。

この理論を確立したのに一週間も掛かつたのに！

一哉君を見ると、いつの間にかフェルマーの書を読み出していた。ちよつと待て。

分厚いマントまだ一枚羽織つてる状態でどうやって腰にあるブックホルダーから抜き出したんだ！？

「あ、ごめんね。前に盗賊の子に教えてもらつて、つい抜き取つちやつた」

「……その癖、直した方が身の為だと思つけれど？」

仕方ないか。

ここで怒りの視線を彼にぶつけるのはお門違いだ。

彼はちゃんとその前に聞いている。

だがな、借りるといふその一言は欲しかったぞ、我が心の友よ。

「レイ、腹は減つてないか？そういう時はイライラしやすいと聞く」

「……そうね、何か食べましょう。ミアアは何か良いかしら？」

「ポトフが食べたいな」

「あ、俺も！」

「カズヤはどれにするんだ？」

読み耽っているおかげで一哉君の耳にはミリアの声が届かなかった。アディアが肩を揺さぶって気付かせようと彼に腕を伸ばしたのをそっと止める。

疑問に思ったアディアに「気にしなくて良い」と言っただけ先に三人分の注文を済ませた。

さっきは悔しく思ったが、物質をそのまま永久保存できる術が完成すれば山越えの時に便利だろう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5799u/>

---

光と闇

2011年12月11日15時50分発行